

# われわれ の境界

## 岳飛故事の通俗文藝の言説における國家と民族（上）

笠井 直美

0. 「傳統的」世界像
1. 『大宋中興通俗演義』ほか
  - 1.1. 『大宋中興通俗演義』
  - 1.2. 『岳武穆精忠傳』
  - 1.3. 『岳武穆盡忠報國傳』
2. 雜劇・南戲・傳奇
  - 2.1. 『東窗事犯』
  - 2.2. 『岳飛精忠』
  - 2.3. 『東窗記』
  - 2.4. 『精忠記』
  - 2.5. 『精忠旗』
  - 2.6. 『續精忠』
  - 2.7. 『奪秋魁』
  - 2.8. 『牛頭山』
  - 2.9. 『如是觀』
3. 『説岳全傳』
4. 忠義 と 國家
  - 4.1. 忠義 の「純粹」化
  - 4.2. 「富貴」の排除 / 「以死報國」
  - 4.3. 「忠孝豈能兩全」
  - 4.4. 忠義 の「述べ方」
  - 4.5. 「皇帝」・「國家」の突出
  - 4.6. 帝・君王 / 朝廷・國家 / 民  
(以上本號)
5. 民族
  - 5.1. 「所屬」の變更
  - 5.2. 境界線の向こう
  - 5.3. 「まつろわぬ者」の分割
  - 5.4. かれら は われわれ を如何に稱する(ことになっている)か
  - 5.5. 「正統性」と「異質性」
  - 5.6. われわれ ?の自稱
  - 5.7. われわれ の成立?

國家といい民族と言っても、もちろん近代の「想像の共同體」たる「國民國家」を前提ないしモデルとしたものではない(副題中の「民族」はエトノスと讀みを振るべきかもしれない)。では、いわゆる歐米型の近代システムが全世界を覆う前、歐米と異なった、しかしそれなりに「高度」な文化圏においては、それとは異なる、どのような「想像のされ方」があったのか？

本稿では、中國近世に流通した言説の中から、「忠君愛國の民族英雄」、岳飛の物語を題材とした元～清前期の戯曲・小説をとりあげ、(近代の言い方を採用するならば民族・國家に相當するような)かれら と われわれ の境界のイメージのされ方、われわれ の語られ方、そしてその偏差と變容を檢討することを通じて、われわれと異なった「想像のされ方」の一端を探りたい。

こうした問題關心からは、叛亂、民變などの社會變動、「異民族」政策や對外關係、王朝交代期における人々の反應等を分析する、或いはそれらについて直接論じた知識人の言説を分析するといったアプローチがまず考えられ、史學・思想史の分野で研究が蓄積されているが、様々な形で流通する言説のシステムが、事象の切り分け方、認識の仕方を深いところで規定し、現實を構築していくことを考えると、そのシステムの具体的なあり方や資料による偏差、それらの相互關係や變容を探ることも一定の意義があると考えられる。

こうした立場からは、(理論的には)當時流通したあらゆる言説が検討の対象になり得、できればもっと多量の資料に基づいて行いたいところである。戯曲・小説を利用するのは、「一流の知識人」でない、できるだけ下層の人々に流通していたもの、規範的な語り方から外れたものをなるべく拾いたいという考えからである。対象とするテキストは、史書からの引用を多く含んでいるものもあるが、本稿では、そうした部分も、出版され・鈔寫され(作品によるが、元末~清中期)/讀まれ・上演された時點において、中國語を讀めるか少なくとも聞き・話せる人々の間で流通していた點を重視して検討したい。

また、小説・戯曲を使う場合、ストーリーの分析がオーソドックスなやり方であり、本稿でも必要に応じて行うが、上述のような觀點から、事象の切り分け方・ラベルの付し方を重點的に検討したい。こうした「述べ方」の選擇は物語内容の選擇ほど自覺的でない(こともある)ため、時には言説内容と逆のベクトルをもつこともあるなど、「無意識的に前提されている考え方」を見るためには格好の材料と考えられるからである。

## 0. 「傳統的」世界像

華夷觀、天下觀などと呼ばれる中國の傳統的世界像については多くの研究がある<sup>1</sup>が、本稿と關係ある範圍でごく簡単に整理しておきたい。まず、「夏」「中華」を中心とし、天子を頂點とした階層的な上下秩序であること。天子は天下に一人であるべきで、中華帝國の皇帝がそれである。價値の基準となるのは衣冠を含む「禮」を核とする文化であり、儒教的規範である。それが天下に普くゆきわたれば理想的な世界になるはずであり、人々はこの規範と文化をどれだけ身につけているかによって階層化される。中心には華、周邊には夷、頂點には天子、そして儒教的教養を持つ士、その下に庶といった形で。ただしその差は段階的・階層的であり、境界は必ずしも固定していない。華夷の別の強調の程度は資料により様々だが、しばしば夷も文化を身につければ「華」となりうる(中華の範圍は理論的には無限に擴大しうる)とされる。しかし、これと異なりかつ對等な文化・規範というものは想定されないし、従って、對等な「外國」というものも想定していない、……。

「對等な外國」が想定されない以上當然の歸結とも言えるが、彼ら自身を稱する一般的な言葉がない(範疇自體がない?)こともしばしば指摘される。しかし、上述のモデル

とはだいぶ異なる（宋帝が金帝に臣を稱して和議を乞わざるを得なかった）時代を扱うテキストにおいて、（近代の言い方を採用するならば）民族・國家に相當するようなカテゴリーと多少とも重なり合う何か（それをとりあえず以下では「民族」「國家」と呼んでおく。特に紛らわしい場合は を付すが、付していない場合でも、こうした含みであって、近代の民族・國家の概念を適用しているわけではないことをご了解いただきたい）があったとすればそれはどのようなものか？

本稿においては、やや迂遠であるが、「1」～「3」において、國家の「想像のされ方」と密接な関係のある、岳飛（ら肯定的に扱われる人物）の忠義（當時どのような言葉で、どのような形で認識されていたかはさておき、現代の我々が、「ここには岳飛の忠義が描かれている」などとまとめうるようなこと）が如何に述べられているかを、検討する。これは、物語内容と関わりが深いので、検討対象としたテキストごとに、(1)書誌の概要・内容簡介の後に、(2)として記す。その後、「4」で主として國家に関わる点、「5」で民族に関わる点の分析を行う。

なお、「1」で取り上げる小説版本は、標題が紛らわしいので節の題の横に記した〔 〕付きの略称で示す（必ずしもその小説を、〔 〕内の人物が書いたと主張するものではない）。

## 1. 『大宋中興通俗演義』ほか

### 1.1. 『大宋中興通俗演義』八巻八十則〔熊〕

(1)楊氏清白堂・清江堂刊本（内閣文庫所蔵、マイクロフィルム版を使用。『古本小説叢刊』第37輯所収。清白堂本と稱す）を用い、仁壽堂・雙峯堂・萬卷樓印本（万曆間刊、内閣文庫所蔵、『對譯中國歴史小説選集』八（ゆまに書房）所収影印本を使用。仁壽堂本と稱す）を参照した。嘉靖内府鈔本（存巻四～六、八、九）が北京圖書館に蔵されるというが、未見<sup>2</sup>。

巻首題「新刊大宋演義中興英烈傳」（仁壽堂本は「新刊大宋中興通俗演義」）。巻頭に「序武穆王演義」（巻二以降及び仁壽堂本は「大宋武穆王演義序」）を冠し、その末尾に「嘉靖三十一年歲在壬子冬十一月望日／建邑書林熊大木鍾谷識」と署し、正文巻首に「鰲峯 熊大木編輯」とある。

目録は八十則だが正文は七十六則。本稿では正文の則數を用いる。

巻首の「序武穆王演義」（「武穆王精忠錄、原有小説、未及於全文」）「凡例」や、正文の注の記述から、この書にはもとなつた小説があり、それを熊大木が史書で校訂し、編纂したものと推定され、Idema（1974）、渡邊（1991）、高津（1992）等が、商略『續資治通鑑綱目』（以下『續綱目』と稱す）、『大宋宣和遺事』、『效顰集』等との関係を指摘している。また、上田（1996）によれば、當時の通俗歴史書には大別して、朱熹『通鑑綱目』系、陸唐老『陸狀元増節音註精義資治通鑑』の系統を引く『少微家塾點校附音通鑑節要』（以下『節

要』と稱す)系、(及び呂祖謙『十七史詳節』系)があり、前二者の長所を組み合わせた『綱鑑』も多く刊行されたという。上田(2000)では、通俗歴史書とこの小説との関係について詳細な検討を行い、この書には、『續綱目』に據る記述と、『節要』の續編部分(劉剡が陳性『通鑑續編』等を基に編輯して増補。以下『節要續編』と稱す)か『節要』系『綱鑑』に據る記述とが存在することを明らかにし、もととなった小説は『續綱目』に基づき、のちに熊大木が『節要續編』か『節要』系『綱鑑』を取り込み、『中興演義』に改編した可能性が高いと推定している。また、石昌渝(1998)は、熊大木「序」のいう『武穆王精忠録』は、尊經閣文庫・宮城縣圖書館等に蔵される朝鮮銅活字本『精忠録』六卷(弘治十四年陳銓序)の底本を増補し、李春芳の序を冠した劉太監増補『精忠録』(已佚)であると推定している。

このように、この書は種々の来源をもつ不均質なものだが、本稿では、出版され/讀まれた時點(明嘉靖以降)において、そうした部分も含めて一つのまとまった書物として流通していたという観点から、検討を行う。

靖康元年の幹離不の侵入から紹興十二年の和議の成立までを主に扱い、金の政變、秦檜の死と地獄での報應(『效顰集』による)、岳飛の名譽回復が付け加えられている。この書においては、岳飛はもちろん重要人物であるが、上述のように史書等を大量に取り入れて歴史演義として仕立てた結果、朝廷内の政争や韓世忠・吳玠ら中興の名將の活躍もそれなりの比重を占めている。<sup>3</sup>

(2)岳飛は自らの 忠義 を隨所で吐露している。多くて一々は擧げきれないが、上司に志を吐露する・盜賊を招安したり部下を叱咤して 忠義 に導く・陥れられて下獄し取り調べの際自己の心情を吐露する、等の場面から幾つか抜き出してみる。

例1 岳飛が最初に招募に應じて劉浩のもとに投じた際、劉浩に何の職を望むか尋ねられ、「胡馬出入、中原播亂、得人出將入相、莫安華夏、百戰百勝、能掃開沙漠、迎還二聖、取天下如反掌、救黎民於塗炭、此飛之素志。」と答え、劉浩に一目置かれる。(卷一第七節。以下1-7のように表記)

例2 岳飛は強盜吉倩らに「如今胡虜不順天道、圍逼京師、……爾衆人輔義立功、留芳史冊、積其富貴傳子子孫、豈不美哉。」と説いて盜賊は「長久之計」でないとし、「爾等奮其忠義、同救君父、正是轉禍爲福之秋、反邪歸正之日、衆人何不自省」と歸順を勧め、従わなければ康王の人馬が「勦捕」に来ることになると言う。吉倩らは「被其至誠所動」で従う。(1-7)

例3 解任され郷里に歸っていた岳飛を張所が招聘し對話した際、岳飛は涙を流して「今日只要掃蕩胡虜、迎還二聖、復其舊日江山、以報國家、此乃我平生之願」と言う。(2-12)

例4 金が建康を攻めるが、守將杜充は城門を閉じて出撃しようとせず、金が長江を渡ってからようやく岳飛を出す。岳飛は黄昏まで戦うが援軍無く、鍾山で孤立する。部下の中には杜充が援軍を出そうとしないのを見て叛去しようと思う者もいた。岳飛は泣いて、「我與爾等感國厚恩、當施忠義、上報朝廷、建立功勳著于國史、雖死時名亦不朽。今若降虜或散爲盜、不爲反臣、則爲賊寇、雖是偷生於世、身死而名壞、遺臭於萬世、豈爲子孫之長計耶。...若是金家得了此城、我宋朝將何以立國于江南、而復中原之地乎。...」と言い、部下たちは「並不敢有別心」と従う。(3-24)

例5 結局杜充が金に降って建康が陥落し、高宗が明州に逃げると、岳飛の部下は「原飛部士皆西北人、平日感岳飛恩信、雖有反復之意、不敢叛去」という状態になり、中には岳飛に「今衆人見中原淪於金虜、皆欲投統制做主、領我等降金、必有重用」と岳飛に皆を統率して金に降るよう頼む者まで出る。岳飛は承知したふりをし、翌日部下を集めて、「爾等隨我與朝廷立功、克復中原、迎回聖駕、身受官爵、光顯門庭、豈不爲榮。今爾等不從我之言、寧先殺我、然後歸投虜寇、吾決不往。」と言って泣き<sup>4</sup>、背中の盡忠報國の刺青を見せると、部下たちは「再不敢異志也」と泣く。岳飛は、「(兀朮の歸路を断って建康を取り戻し、さらに)迎回天子、以圖恢復中原、爾輩富貴不患無也」と言うと、部下たちは喜ぶ。(3-24)

例6 岳飛は楊么の將黃佐らを招安し、「今中原淪沒於金人、大駕不獲寧居、爾等正宜擣忠戮力、共扶王室、久後遣名汗簡、子孫受無疆之祿、千載一遇也」と言う(5-41)。

例7 岳飛は檄文を發して太行山の忠義壯士や兩河の豪傑を麾下に集め、北進して汴梁に迫り、諸將に、「汝等皆當用命、恢復中原、迎回二帝、取富貴在此一舉」と叱咤する。(6-57)

例8 朱仙鎮に班師の詔がもたらされ、岳飛は「(金が総崩れになって逃げ)、豪傑向風、士卒用命、...機會難得。臣實謂恢復中原在此一舉。今若召臣回還、挫了十年之功一旦而廢。...」と上奏するが容れられなかった。(7-58)

例9 岳飛は陥れられて捕えられ、周三畏の取り調べを受けるが、その際の「招状」は彼の擧げた戦功を年を追って縷々述べたものだった。岳飛は「盡忠報國」の刺青を見せ、「吾父子爲國多着勤勞、...未嘗不以恢復爲意、豈知今日把我父子性命而報<sup>5</sup>虜耶」と泣く。周三畏も涙し、これは秦檜の奸計と考え、官を捨てて出家し道士となる。(7-65、66)

例10 万俟卨が岳飛を取り調べ、厳しく拷問するが、岳飛は「我一生立心務要恢復中原、雪國之恨、用了十年之功、追趕兀朮於朱仙鎮。...此時朝廷若寬我三日限期、必定克復汴京、迎回聖駕、然後進取燕雲、直擣黃龍、報復國讐、迎取先帝太后回朝、此乃是我平生之願、有何異心。皇天后土可表我心。」と反論して屈しない。この時書いた「招詞」も、李勣・諸葛亮等の古人に倣い、「先俘胡虜于廷拜舞、次迎帝母内殿安然、

方表中原一統、始爲天下獨尊、乃滿飛心可全于志。」との志をたて、数々の戦功を立てたことを述べ、「閻羅殿下知我忠心、速報司前本無反意。天廷不昧、必誅<sup>6</sup>相府奸臣難分皂白、地府有靈、定取大理寺官共證是非。」と結んだものであった。(7-66)

岳飛の掲げる目標として、「恢復中原」「迎還二帝」がたびたび繰り返されている。〔熊〕には、上奏文をはじめ岳飛の文章が少なからず引用されているが、高宗即位後、京への還幸・中原の恢復を請う上奏文(2-11。これにより官職を解かれる)や、金が淮河を超えて南侵した際、その虚を突き長駆して汴京を取るよう提言した上奏文(7-62)等も、この印象をさらに強める。

捕えられた後の岳飛は、取り調べにおいて、「恢復中原」の志をもってこれまで奮闘してきたこと、自己の功績を縷々述べて無罪を主張している。これはまことにもっともで自然な主張であるが、明末の一部の戯曲テキストに見える岳飛の形象とは大きく異なる。

また、「汝等皆當用命」等、一心に・命を捨てて盡くすべきことを説く語も見える(がそれほど多くない)一方で、特に部下や盗賊に対しては、それが名を揚げ「官爵」「富貴」につながることを強調している(例2、例5、例6、例7、「例11 值取功名富貴之秋」(2-14)、「取功封侯」(7-58))。宗澤が王善を招安する場面でも「功名」「封侯」が得られることを強調する(2-11)など、こうした記述は随所に見られ、「官爵」「富貴」を動機としていても、それは 忠義 たることを傷つけず、大いに勧められるべきことという印象を與えるようになっている。

## 1.2. 『岳武穆精忠傳』 六卷六十八回〔鄒〕

(1)天理圖書館藏玉茗堂本のマイクロフィルム版を使用。巻首題「岳武穆精忠傳 吉水鄒元標編訂」。封面「玉茗堂原本／精忠全傳／本衙蔵板」。序「岳武穆王精忠傳」、末署「吉水鄒元標撰」。(これは〔熊〕の系統、映秀堂刊本の巻首にある「精忠評論」岳飛評に同じ)。版心下部にとりどころ「文成堂」(巻三第五、二十五葉等)の書肆名が見える。人民文學出版社所蔵の寶旭齋刊本は天啓七年刊という(戴不凡：1980：298)が未見。

鄭振鐸(1934：363)は、「復興了傳奇的趣味、修訂了熊大木的舊本、而捨棄了于華玉改本的迂腐的。精忠傳到了此時已進步得很不少了。」と述べるが、上記玉茗堂刊本で見られる限りでは、新たな傳奇的ストーリーが加わっていたりはしない(鄭振鐸が使ったと思われる寶仁堂刊本と、玉茗堂本とが相違しているということだろうか。待考)。

孫楷第(1982[1933]:59)の「此書即熊大木刪節歸併」という指摘のとおり、基本的には〔熊〕に基づき(清白堂本よりは仁壽堂本に近い版本に基づいたと思われる節がある)全體に冗長部分の簡略化、語句の前後入れ替えによる簡略化、白話として標準的・類型的な表現への書き換えが行われている。孫楷第が指摘するように、省略したために話がおかしくなったり文意が通らなくなっているところがあり、また、〔熊〕の評はほとんど削

除され、ごく一部が本文に繰り入れられている。

ストーリーの上では、〔熊〕と大きな差はない。細かい差異は随所にあるが、例えば五國城に二帝を見舞い康王への詔書を預かった靈州総管の漢人周某の父周忠は、〔熊〕では西夏に捕えられて降り、それから金と西夏の戦争で金に降ったことになっているが、〔鄒〕では直接金に降ったように書かれている(1-5)、金が四川に侵入し、三百の兵で金將劉夔の攻撃に抵抗し三泉を守っていた劉子羽が吳玠に遺書を送った際、〔熊〕では吳玠は見捨てようとしていたが張彦ら部下の言に従い救援に向かった(4-35)とし、〔鄒〕ではすぐ救援に向かったことにされている(3-31)等である。

従って、(2)についても独立して項目を立てるほどの特徴はないので、4.で必要に應じ言及する。

### 1.3. 『岳武穆盡忠報國傳』七卷二十八則〔于〕

(1)友益齋刊本(『古本小説集成』第三批所収影印本)を使用。巻首題「武穆盡忠報國傳」。「由 繇」、「檢 簡」等の忌諱から、崇禎年間の刻とわかり、また、巻頭の金世俊「盡忠報國傳敘」から編纂時の状況が知られ、于華玉が義烏知縣となった崇禎十五年の刊と推定されている。

鄭振鐸(1934:362)等も紹介しているが、本稿の關心に従ってまとめておく。〔熊〕に基づきつつも、二帝北狩や「掃秦」など神怪的故事(〔熊〕の1-4、5、8-70、71、75、76や、李氏・岳銀瓶の夢占いなど)を削除している。口語的表現や饒舌な戦闘描寫、詩詞、詔や挑戦状等を削除して簡略化する(ただし上奏文・上疏等は残されているものも少なくない)。文語的表現への改變・簡略化、宋の正統性と抵触する表現の削除・改變もある(4で後述)。〔鄒〕ほど多くはないが、削除のため文意が通らなくなった箇所が散見する。史書から離れた内容を史書に近づける方向の改訂も行っている。史書を参照し、正文を書き變えている(高宗の即位地を南京(應天府)に訂正する(1-4)等。凡例にも「正厥體制、芟其繁蕪、一與正史相符」とある)場合と、正文はそのままにし評で史書との相違を指摘する場合(鎮江で韓世忠に敗れた兀朮を岳飛が迎撃したのは建康ではなく安東であると指摘する(3-12)等)とがある。〔熊〕の評・「通鑑曰」はほとんど削除し、独自の評(各則総評・眉批)を加えている。総じて、高級化、文人化をめざしたテキストと言えるだろう。

(2)岳飛が風波亭に連れられてきて、(道月の偈と應じていることに氣づき)自分の死を悟って、〔熊〕では、「例12我若早信道月長老之言、必不遭此風波之難」と嘆く(自分のことだけ言っている)のみなのに對し、〔于〕では、「例13二帝蒙塵、虜酋未滅、吾身遽死乎」(7-27)と國家を思う氣持を先に言うことになっている。また、〔熊〕の例6は「子孫受無疆之祿」が削除されており、いずれも 忠義 の純粹さが強化される改變と言えよう。

## 2. 雑劇・南戯・傳奇

### 2.1. 『東窗事犯』

(1)正名「地藏王證東窗事犯」、『古本戯曲叢刊』第四集影印『元刊雜劇三十種』本を使用。『録鬼簿』・『太和正音譜』著録、孔文卿撰。

岳飛故事に取材した現存する通俗文學作品の中で、最も古いものである。『元刊雜劇三十種』本は、元末刊、觀客の觀劇の便に供されたテキストと推定されている(岩城:1961、金文京:1983等参照)。白・科が少ないため、詳細がつかみにくい、粗筋は以下のようになる。

朱迂〔仙〕鎮で金と對陣する岳飛が召還され(楔子)、秦檜の讒言により大理寺獄に監禁される。岳飛はこれまでの功業も空しく無實の罪に陥れられたことを嘆き、岳雲・張憲と共に殺される(第一折。以下「1」のように表記)。地藏神の化身、呆行者が靈隱寺で秦檜の謀略を暴露して擲し、將來良くない終わりを迎えるであろうことを予言する(2)。何宗立は秦檜より東南第一山に呆行者葉守一を捕えに行くよう命ぜられる。地藏王に会い、地獄に拘引される秦檜を見、「東窗事犯(東窗でのことがばれた)」と夫人<sup>7</sup>に伝えるよう頼まれる(楔子)。岳飛は天佛の牒、玉帝の勅を奉り、東嶽聖帝より高宗の夢に訴えることを許される。宮殿に入り、辛酸をなめ命を捨てて邊庭に戦い功を立てたのに報われず、金と結んだ秦檜の奸計によって無慘に命を落とした次第を訴え、秦檜を誅戮し、自分を祭るよう懇請する(3)。呆行者を捕えに行った何宗立は二十年過ぎ、新君の御代となつてから歸還する。あの世で裁判が行われ、夫人の努力にも関わらず秦檜は厳しい處罰を受けることとなり、岳飛ら三人は昇天した経緯が唱われる。最後に岳飛の魂が登場、劇の内容を総括し秦檜の九族を誅戮し屍體を切り刻むよう訴える歌を歌い、地藏神の隊列が登場、斷を下す(4)。

岳飛の冤魂苦訴と、神仏による秦檜への應報が中心となっており、「英靈鎮魂の『建醮』の儀禮形態を直接に引き継いだ初期的形態の『鎮魂劇』」(田仲:1981:223)としての性格が指摘されている。

(2)1,3に見える岳飛の歌唱を検討すると、上述のように、無實を訴えること(例えば「例14非是岳飛造反、皇天可表」「例15既是我謀反、那里我積草屯糧、誰見來?」(1岳飛白))のほか、「これまでたてた功業を訴える」こと、「秦檜の誅戮を要求する」ことが中心となっており、ある意味では自己中心的で恨みがましい内容になっている。大きな功業を立てながら無實の罪で殺された人物の訴えなのだからそれが自然なのだが、これは後世の一部のテキストに見える岳飛の形象とは大きく異なる。自己の奮闘・功業を強調した句は多くあるが、例えば、「例16我與你重安定了四方、戰沙場幾個死、破敵軍幾處傷。」(1【天下樂】)、「例17恁尋思試想、向沙場戰場。恁尋思試想、俺安邦定邦。」(1【那吒令】)「例



18 臣等三人每曾與國家出氣力來(3 岳飛白)はまだ素直な言い方だが、

例 19 我不合扶持的帝業興、我不合保護的山河壯。我不合整頓的地老天荒。(1【那吒令】)

例 20 我不合扶一人立爲帝、交萬民失望。我不合於家爲國無明夜、將煙塵掃蕩。我不合仗手策憑英勇、占得山河雄壯。(1【村里逐鼓】)

例 21 我不合降威方揭寨施心亮、我不合捉李成賊到中軍帳、我不合破金國扶立高宗旺。(1【寄生草】)

例 22 臣海外收伏〔復〕了四百州。(3【聖藥王】)

「(こんな目に遭うなら) そうするべきではなかった」というのはやや恨みがましく、また自己の功績を大きく言い過ぎているような印象を受け、「帝を立てる」というのもいささか不敬な言い方である<sup>8</sup>。さらに、

例 23 見有侵境界小國邊邦、秦檜結勾起刀槍、陛下則怕你坐不久龍床。(1【賺煞】) という不敬かつ不吉な予言も行っている。

また、『東窗事犯』中での岳飛は、出世欲・名誉欲があったことを隠さない。「例 24 臣望寫皇〔黃〕閣千年不朽、標青史萬代名留。」(3【禿廝兒】)、「例 25 凌煙閣番〔翻〕作抱官囚。」(3【聖藥王】)、「例 26 不能勾勅賜官封萬戶侯、想世事悠悠、嘆英雄逐水流。」(3【綿答〔搭〕絮】)、「例 27 臣將抽頭不抽頭、向殺人處便攢頭。秦檜安排釣鈎、正着他機勾、怎生收救。臣當初只見食不見鈎。」(3【拙魯速】)、「例 28 今日都撇在九霄雲外、不能勾〔夠〕位三公日轉千階。」(4【柳葉兒】)」等、岳飛が官や封侯を望み、名を揚げようと望んでいたことは、その功績や忠君を傷つけることでは全くなく(むしろそれを強調するものとして述べられており) そうした欲望のため秦檜の罠に引っかかったことも自認している、つまり恥ずべきことととらえるより、不運で不都合なこととして述べられている。

## 2.2. 『岳飛精忠』

(1) 『古本戲曲叢刊』第四集影印脈望館鈔内府本を使用。正名「宋大將岳飛精忠」。末尾に「萬曆四十三年六月廿五日校内本 清常道人」とある。小松(2000)によれば、内府本は嘉靖年間に成立したものが含まれ、萬曆年間まで下るものも存在する可能性があるとのことである。内府本は皇帝の御前で上演される前提で書かれているため、俳優が皇帝に扮しないほか、皇帝及び皇帝を頂点とする秩序に関わる表現に一定の規制(及び逆方向の強調)が見られる(孫楷第:1953及び注8諸掲の各論考を参照)。粗筋は以下の通り。

金の兀朮が粘罕・鐵罕を先鋒として侵攻し、李綱は、秦檜・岳飛・韓世忠・張俊・劉光世等を招いて協議する。金と密約している秦檜は和議を主張するが、岳飛はじめ諸將は出兵を主張し、秦檜を批判する。李綱は岳飛に韓世忠ら諸將を率いて金軍に当たらせる(1)。金の挑戦状を受け、岳飛は、諸將に役割を割り当て、戦いの手はずを整える(2)。粘

罕・鐵罕がおどけながら登場、まず宋軍と一戦を交えるが、張憲に簡単に破られて逃げ歸る(楔子)。兀朮は粘罕・鐵罕の敗戦に怒り、金沙灘に拐子馬を連ね戦いを挑む。岳飛は麻扎刀で馬の足を切り倒すように命じてこれを破り、伏兵していた韓世忠らが鐵罕・粘罕を捕える(3)。李綱は岳飛らの大勝の知らせを聞き、聖旨を奉じ、宴を開いて諸將を稱揚する。粘罕・鐵罕は斬首され、岳飛はじめ諸將は官を加えられる(4)。

史書に見える事件に取材したものでないだけでなく、隨所に史書とは異なる荒唐無稽な設定の見える「岳飛を中心とした中興の諸將が金を破り賞せられる」劇と言えよう。

(2)脈望館鈔本の性格から言って當然のことながら、この劇では、岳飛はじめ諸將の赤心報國の志、金への敵愾心が隨所で(出陣に当たって・勝利を収めて等)述べられる。

例29 他每都赤心報國不憚勞。他每扶持的社稷寧、輔安的邊境峭。(1【天下樂】)

例30 俺怎肯和議匈奴、阻擋[擋]兵刀。……我直殺的大金兵鬼哭神嚎。(1【鵲踏枝】)

例31 大金家倚仗他人強馬壯中原鬧、欺負俺兵微將寡先鋒老。倚仗他弓勁劍利多糧草、堪恨這腥羶醜陋契丹人。(1【寄生草】)

例32 鬪的這大金兵似鼠如猫。憑着我馬跑[咆]哮直殺的他痛哭嚎[嗥]。(1【尾聲】)

例33 四將合兵擊大金、全憑報國盡忠心。(1劉光世下場詩)

例34 俺俺直殺的潑匈奴鬼哭神嚎、大金家人亡馬斃。契丹軍喪膽亡魂、把沙漠肅清。(2【梁州】)

例35 一箇箇赤心報國安天下、捨死亡生建大功。(2韓世忠下場詩)

例36 領着這數千員敢戰鐵衣郎、一箇箇盡忠心將虜掃蕩。(4【新水令】)

官位に執着する言辭は秦檜のものであり(例37「四位將軍、你也閑爭氣。如今你官極一品祿享千鍾、兩陣上槍刀無眼、倘有些好歹可不干丟了你許大官職。(1)」)、當然ながら、それは岳飛から、「例38 學士出言賣國、……爲臣死忠、爲子死孝。」(1岳飛白)、例39 你不肯把朝綱立、你則圖官位高。」(1【寄生草】)、例40 爲臣者坐國家琴堂食君王俸祿、全無盡忠之心、盡懷反叛之意、將官位欺人、是何道理也」(1岳飛白)等と批判される。

ただし、名を揚げる事への意欲は、諸將の忠義の現れとして肯定的に用いられている(例41 全憑忠義安天下、萬古千秋播姓名。」(1張俊下場詩)、例42 削除賊寇安邊境、留<sup>9</sup>取芳名貫古今。」(2劉光世下場詩)、例43 只殺的腥羶醜虜盡伏降、英雄天下把名揚。……立功勳姓顯在凌煙上。(4【駐馬聽】)、例44 怎消的麟閣標明圖像。」(4【太平令】)等)、すなわち、「高い官位を圖り」、まして「封侯」「三公」の位を望む欲は秦檜のような否定的人物の抱くもの、「盡忠」の純粹さを損なうものとして、切り分けられ、排除されている。岳飛ら肯定的人物は「赤心報國」例45 一雪國恥、二救黎民」(1張俊白)、例46 一雪國家之恥、二報二帝北行之苦也」(1李綱白)のような「純粹」な動機のみを表白するものとされている。

## 2.3. 『東窗記』

(1) 『古本戯曲叢刊』初集影印金陵富春堂刊本を使用。巻首題「新刻出像音註岳飛破虜東窗記」。二巻四十折。『永樂大典』戯文十五に「秦太師東窗事犯」が著録され、徐渭『南詞敘録』『宋元舊編』に「秦檜東窗事犯」を著録する。『南詞敘録』『本朝』にも「岳飛東窗事犯」があり、「用〔周〕禮重編」の注記がある。岳飛故事の南戯が宋元以来流傳していることがわかり、『東窗記』はそれを改編したものの一つと考えられる。このテキストには編者の名が記されておらず、莊一拂(1982:51、98)は「宋元闕名作品・秦太師東窗事犯」と「姚茂良・精忠記」の雙方に列し、郭英徳(1997:11)は周禮撰としている。富春堂刊行の南戯で刊年がわかるものは、おおむね萬曆年間の刊行なので、このテキストもその頃の刊行と推測される。嘉靖刊『風月錦囊』巻十三、萬曆刊『群音類選』諸腔類に第三十一折に相當する折が収められる。(『風月錦囊』本と『東窗記』、『精忠記』の関係については、孫崇濤:2000:121-122参照)。千田(1997:56)は、「弋陽本の台本であると思われる」とし、孫崇濤(1998:223)は「明人改本戯文」の一つとしている。

粗筋は、岳飛が聖旨を受け家族に別れを告げ金を討ちに出撃し、兀朮の拐子馬・鐵浮圖を破る(2~9)。秦檜は兀朮から岳飛父子を殺害し金の恩に答えよと要求した蠟丸の手紙を受け取り、妻王氏の計に従い岳飛を班師させる(10~13)。岳夫人張氏・娘の銀瓶は不祥の夢を見て道士を招き禳解の儀式をしてもらう(14、15)。岳飛は金山寺の道月和尚に牢獄の禍を予言されるが信じられず、そのまま臨安に向かいを捕えられる(16、17)。秦檜はまず周三畏に、(周三畏が岳飛の無實を知り逃亡すると)次いで万俟卨に岳飛を勘問させるが岳飛は屈せず、迷って東窗下で王氏に相談し、王氏の言に従って風波亭で岳飛・岳雲・張憲を殺させる(18~23)。岳夫人張氏・娘の銀瓶は伴當張保の知らせを受け、杭州に行き、遺體の得られぬまま井戸端で三人を祭り、あいついで井戸に身を投じ自殺する(24~27)。秦檜は靈隱寺で風行者葉守一(實は地藏王)に悪事を暴露され、岳飛の副將施全に襲われ、岳飛らの幽霊を見たりして病になる(28~32)。岳飛らは上帝より官に(張氏・銀瓶は仙女に)封ぜられ、また報冤殿で秦檜等の勘問を行うよう命ぜられ、相繼いで地獄に拘引された秦檜・王氏・万俟卨を裁く(33~39)。朝廷は岳飛のため西霞嶺に忠烈廟を建立し、岳飛はじめ家族・張憲を封ずる(38、40)。

やはり岳飛の班師・死・報應を中心とし、道月の予言・周三畏掛冠・銀瓶(・張氏)投井・施全の秦檜暗殺未遂等、現在よく知られる話柄が一通り出そろっており、誣告者として王俊の名も見える。またこのテキストでは、岳飛を陥れるのに王氏が主導的役割を果たしており、この方向性は以降のテキストでさらに強化される。張氏・銀瓶が要所要所で登場し、最後に自殺して「節」「孝」を讃えられるのは、南戯らしい特徴と言える。また、天界・地獄で報應が行われると共に、現世で朝廷が岳飛らを封ずると、「現世での救済」が添えられているのも注意される。

(2)『東窗事犯』では岳飛が自分の功業を擧げるのを主としているのに對し、『東窗記』では、それと共にその動機・心(「盡忠報國」「赤心報國」、二帝の歸還や失地の恢復など)も強調されている。「例47赤心報國管得勝成功」(9【滾滾玉】)といったストレートな形のほか、

例48 當今蠻夷猾夏、邊界驚塵、宗社南遷、二帝有蒙塵之恥。……竭力事親乃爲子職之分、盡忠報國實爲臣子之當然。若以孝爲忠<sup>10</sup>、可圖存匡復。正是飢餐胡虜肉方稱吾心、渴飲匈奴血、始遂正願。(2岳飛白)

例49 怎容蠹爾成邊釁、惟赤膽秉忠貞。管教兩京恢復、飛誇逞四海皆爲堯舜民。(4【大聖樂】)

例50 年少昂昂振武威、隨征進殄滅蠻夷。敢效臣勞不辱君命、談笑功名成遂。(6【掛眞兒】)

例51 掃蕩胡塵、…恢復山河<sup>11</sup>遂我平生。(6【催拍】)

例52 出師千里淨胡塵、百戰捐軀仗赤心。(7下場詩)

のように金への敵愾心と結びつけて述べられた例は多く、また、例48や、

例53 各各當效忠貞。迎二聖復州城、雪臣恨、立功名、管得勝、見昇平。(7【紅繡鞋】)

例54 今恢復東京不遠、願迎蒙塵二聖、…方表我數年間忠誠之志。(9【五馬江兒水】)

のように、二聖の歸還・失われた地の恢復が繰り返し目標として掲げられており、それは、

例55 俺主人只爲二帝蒙塵中原甚汚、一心要精忠報國、立意復仇。(32施全白)

例56 實指望蒙塵二帝還、恢復中原、……半路被奸賊忠義遭傾陷。(32【步步嬌】施全唱)

のように周囲の者だけでなく、「例57岳飛父子盡忠報國、殺金人望風而走」(18周三畏白)のように、他の人々からも認められている。

岳飛は捕えられてからは、「例58奮英雄恢復河南郡、…一日有十數遭惡戰征、殺得那金人盡逃形。」(18【鎖南枝】)、「例59皇天可表岳飛岳飛盡忠報國、今遭刑憲、豈有按兵不舉之罪。」(18岳飛白)、「例60我父子三人歷戰場、要平金掃討邊疆。」(20【集賢賓】)、「例61朝廷建大功、英雄猛勇、赤心報國期盡忠。」(23【楚江岸邊】)と、これまでの功勞と赤心報國の心を述べて無罪を主張し、秦檜を批判するほか、「例62做了郊園烏盡也、弓藏也。……想我功勞也是空、名高也是空、都做了一枕南柯夢。」、「例63想我三人蓋世功、……盡忠的也是空、都做了一枕華胥夢。想我功勞是可矜、安邊是境、誠心處國能盡命。……功高也是空、名多也是空、都做了一枕黃梁夢。」(23【楚江岸邊】)と、盡忠も功勞もむなしくむだとなったと、恨みがましい嘆きも見える。

また、『東窗記』では、岳飛がまず單身臨安に行つて捕らわれ(18)、自分の死後岳雲らが仇を討とうとして忠孝の名を傷つけることを恐れ、手紙を書いて(20)呼び寄せ、捕えさせる(22)ことになっている。(ただし、岳雲・張憲が獄に下される前、岳飛のみ勘問されている部分に、例60や「例64父子三人都受刑」(18【山坡羊】)などが見えることから、三人いっしょ

に捕えられて勘問されているという設定だったものを改変した可能性が疑われる<sup>12</sup>。「我が子をだまして呼び寄せ、獄に下させる」という些かグロテスクな行い<sup>13</sup>は、「例65他若知我受此冤屈、必然領兵前來報冤、難成我一生忠孝之名。(20【集賢賓】)」例66如今親手寫書一封與我孩兒一同到京同受其罪、庶得全家一切忠孝之名。(20岳飛白)」という意圖に出るものであり、獄に下された岳雲が、「例67早知今日有此陷害我父子三人、便不應詔當得何罪」と嘆くと、岳飛が「例68孩兒休説閑話、生死一處可全忠烈之名」と叱るなど、「忠孝」「忠烈」として性格づけられている。

一方、岳飛・岳雲・張憲らが功名を立て封侯されることを望んでいることを表す曲辭・せりふは隨所に見られる(「例69擬在凌煙著姓名。」(4【尾聲】)「例70報國盡誠<sup>14</sup>、…一旦成功萬載揚名。」(6【催拍】張氏・銀瓶唱)「例71功成奏凱班師日、管取凌煙閣上圖。」(6下場詩)「例72百戰功誰能敵、指望封侯成顯職。」(23【五更轉】)等)、朱仙鎮で班師を命ぜられた場面でも、二帝や「百姓塗炭の苦しみ」にふれつつも、「例73爲臣盡忠報國應奈、幾年汗馬多力戰。博不得功就名成姓字顯。」(13【歸朝歡】)と「功名が成らず名が顯れない」ことを嘆く。道月長老に金との戦いを聞かれ、「例74殺得醜虜盡投降、……博一人衣紫腰金用咱爲卿相。方顯男兒當自強、四方名揚、元帥英雄不可當。」(16【駐雲飛】)とその功を誇り、高位に封ぜられることを信じて疑わない。そのためか、道月が「喪身の患」があり、夢を解いて「牢獄の禍がある」と警告しても、「例75雖有奸邪黨、怎把精忠謗。嗟、勳業世無雙、鎮邊方、列土封侯拜受君恩賜、圖像麒麟萬古揚。」(16【駐雲飛】)と信ずることができない(ある意味ではそれが人情の自然なのだが)。岳飛が、そうした功名・封侯を望み、またそれを受け得る功績を挙げたと思っているように描かれていることは、そう望み・思うことが、岳飛の盡忠・忠心を損なうものではなく、むしろその強さを強調し、彼の不運・悲劇を強調すると考えられていることを示すと言えよう。

#### 2.4. 『精忠記』

(1)『古本戯曲叢刊』初集影印汲古閣刊本を使用。巻首題「精忠記」。『曲品』著録(撰者名を記さず)。『古人傳奇総目』著録、「姚静山所作」。二巻三十五齣。テキストには撰者名が記されておらず、莊一拂(1982:98)は姚茂良撰とし、郭英徳(1997:327)は佚名とする。『東窗記』とストーリー、曲辭ともかなり重なり、もとにしたテキストが共通するなど、何らかの形で共通の来源をもつと考えられる(孫崇濤:2000:121-122をも参照)。

情節としては、万俟卨が糧草の納期に遅れて處罰される(『東窗記』9に對應する齣で、『精忠記』8に見える。以下9/8のように表記)・岳飛に敗れて退却しようとする兀朮を書生が止め、權臣(秦檜)を利用することを教える(「叩馬」11/10)等が加わり、岳飛夫人張氏は(投身ではなく)頭をぶつけて自殺する<sup>15</sup>(27/26)等の相違があるほか、岳飛父子の殺害を命じられた徐寧等が(岳飛は勇猛でとても殺せないと考え)自盡してくれるよう頼み、

岳飛がそれを受け入れ、死に臨む(22)一齣が加えられている。また、『東窗記』では万俟卨が岳飛一人を勘問した(20)後、岳雲・張憲を含め三人を勘問し<sup>16</sup>、彼らが赤心忠膽であることを認め、殺せば天が許さぬだろう、と考える(23) となっているが、『精忠記』では万俟卨はあくまで憎らしげな口をききながら岳飛らに自白させようと(21) 悪玉ぶりが強調されている。

(2)大筋は『東窗記』と同じであるが、以下のような相違点が注目される。

『東窗記』になく、『精忠記』に見える要素として、

例76 岳飛らが出撃の際、二聖の歸還を目指す句「二聖鑿輿返、三軍唱凱歌聲。」(7/6【一撮棹】)が増している。

例77 岳飛が兀朮との戦いに際し二帝を歸すようしつこく要求する。戦陣に臨みまず「羶羯狗、快送二聖皇帝出來」と言い、また、勝利して捕えた金將土胡朮に「...我放你回去做個遞書人、好好說與那羶羯狗、快送二聖皇帝復歸本朝萬事全休、聲言不肯、俺整頓人馬直抵黃龍府迎取二聖還朝。快走！」と怒鳴りつけて歸してやる。

(9/8)

等があり、岳飛らの動機が(自己の立身出世などより「純粹」な)二帝の歸還にあることがより強調されている。また、朱仙鎮で班師の詔を受ける際、『東窗記』では「例78 朝廷差田思忠賚詔前來、未知道是何如」(13岳飛白)とあるのを、『精忠記』では「田思忠賚詔前來、不知真假」(12岳飛白)とする。岳飛が班師をためらったのは(本物の詔と違ってなおかつ逆らったのではなく)二帝の詔と疑ったからだという形で、岳飛の 忠義 を防衛している。

岳雲が下獄して岳飛に會った場面で岳飛に言う會話、『東窗記』の例67は、「當初聽了孩兒殺到黃龍府、迎取二聖還朝、將功折罪」(23/22)に改變されている。實質は同じことを言っているが、それが「不應詔」(=反)であるよりむしろ 忠義 であるように受け取れる表現に變更されている。朱仙鎮で岳飛が岳雲らに(残留するのではなく)鄂州に歸るよう指示する(13/12)のも(情節の混亂をなくすとともに)、岳雲らが残っていればそれは「不應詔」(=反)ではないかという批判を免れる効果があろう。

すなわち、微妙ながら岳飛らの忠心の純粹さをより強調し、( 忠義 を厳しく要求する立場から見れば) 忠義 を傷つけると見られる要素(「不應詔」)をできるだけ薄める改變がされていると言えよう。

## 2.5. 『精忠旗』

(1)『古本戲曲叢刊』第二集影印墨憨齋刊本を使用。巻首題「墨憨齋新訂精忠旗傳奇」。二卷三十折。『今樂考證』著録。「西陵李梅實草創/東吳龍子猶詳定」と題し、李梅實撰を馮夢龍が改編したものとされる。李梅實については詳細は不明。「由 繇」「檢 簡」などの

忌諱からして崇禎年間に刻されたと思われるが、金を指した言葉が入るべきところに不自然な削れ方や埋木改刻を疑わせる部分があり<sup>17</sup>、実際の刊行は清代と推定される。

岳飛は副元帥宗澤の部下、韓世忠・楊存中とは結義して兄弟となっている。金の侵入、二帝北狩を聞き憤り、張憲に命じて盡忠報國の四字を背中に彫らせる(2)。李若水は、皇帝に隨行して金に捕えられ投降を勧められるが、金人を大いに罵り殺される(3)。兀朮は撻懶のもとにいた秦檜をスパイとし、かねて自分と私通していた王氏とともに南歸させ(3)。秦檜は宋で勢力をふるう。岳飛は聖旨を受け、出撃の準備をする。壕を越える訓練で岳雲の馬が躓くと厳しく罰し、民間のものを少しでも略奪した者を斬首させ、監督が厳しくなかったという理由で王貴をも打たせる。四川の吳玠から美姫が贈られるが、岳飛は丁重に禮を言って返す(4~7)。兀朮を常州に破り、彼らが牛頭山から建康に向かうと見て伏兵してこれを破り、皇帝から精忠旗を賜る。娘の銀瓶からも戦袍と盡忠報國旗・岳字旗が届けられる(4~10)。岳飛はさらに歩兵・麻扎刀で兀朮の拐子馬・鐵浮圖を破る(11)。金軍は岳飛を大いに恐れるが、一人の秀才に示唆されて、兀朮が秦檜・王氏に蠟丸に封じた手紙を送る(12~14)。岳飛が朱仙鎮に駐屯中、合計十二の金牌を持った勅使が至り、迫られてやむをえず班師し、岳飛が取り戻した河南の諸州は再び金の手落ちる(15,16)。張俊は王貴・王俊を告發役として秦檜に教え、王俊は喜んで、王貴は脅されて従う(17)。楊存中は岳飛捕縛の命を受けるが、義兄弟のよしみを思い、先に訪問して自裁を勧めようとする。岳飛は敢えて従わず、從容として縛に就く(18)。秦檜に取り調べを命ぜられた李若樸は秦檜に真っ向から反論して官を捨て、何鑄は病と稱し引きこもり、万俟卨<sup>18</sup>が勘官となる。岳飛らを拷問するが、精忠の志、二帝を思う心を聞かされるばかり、自分で招状・押字を捏造して死罪とする(19,20)。秦檜は韓世忠に面詰され、また薛仁輔・宗正・士衷らの反對に遭い、迷っていたが、王氏の言に従い聖旨を偽造して岳飛を獄中で殺させ、張憲・岳雲も處刑する。劉允升は伏闕上書して秦檜を弾劾した上で刑場に駆けつけたが間に合わず、自殺する(22~27)。知らせを聞き、銀瓶は井戸に身を投げる。岳飛の四子を嶺南に流すための捕吏が門前に至り、岳飛夫人李氏は孫の岳珂を蒼頭に託し、井戸に身を投げ(28)。兀朮らは岳飛の死を聞いて祝い合う。金に抑留されていた洪皓は蠟丸密奏でこれを伝える(29)。岳飛の子のうち、年少の岳震・岳霽は護送の途中、病氣・自殺で死亡する(30)。殿司小校施全は秦檜暗殺を謀るが未遂におわる(31)。秦檜は岳飛らの幽霊を見るようになって病となり、何立に泰山嶽廟に祈願しに行かせるが、効なく死亡する。湯鵬舉らの弾劾により、諡號は取り消され、秦檜は革職された。(32,33)。何立は泰山嶽廟に泊まり、秦檜が牛頭馬面に責め立てられるのを見、「東窗事發了」と夫人に伝えるよう頼まれる。これを聞いた王氏も倒れる(34,35)。岳飛らは玉帝より封ぜられる。秦檜等が護送され、岳飛はこれを罵り、鬼卒に打たせる。地府では岳飛を招いて秦檜等に判決を言い渡し、各種の地獄に送り込む。孝宗の世となり、太學生程宏圖、岳珂の上書

に應じて聖旨が下り、岳飛らは名誉を回復し追封・追贈を受け、忠烈祠に祀られることとなり、韓世忠・薛仁輔・士衷・劉允升・施全・程宏圖らも賞される。死亡している秦檜・張俊・万俟卨らは原官を追奪、諡を改め、罰することとなった(37)。

以上、やや煩瑣に述べたが、巻末に「據宋史分回出折」とある通り、史書、特に『宋史』に基づいて加えられたり変更された人物・情節が多いことを示したいためである。李若水、岳雲處罰、吳玠の美姫、張俊の役割、何鑄、李若樸、薛仁輔、宗正、士衷、劉允升、洪皓、程宏圖などは『宋史』に見える(ただし、當然の事ながら完全に史書の通りではなく、アレンジされているものもある)。一方、岳飛故事の古層たる「地蔵王(風行者)掃秦」や、道月の予言はなく、報應を示すための最低限のプロット以外、「怪力亂神」が排除されていると言えよう(或いは佛教を排するということがかもしれない。このテキストでは、恐らく岳飛故事の流傳とつながりが深かったと思われる、靈隱寺・金山寺が全く登場しないことになる。その境界線は、史書または雑記などの先行の文獻に載っているかどうかだったと思われる<sup>19)</sup>。もちろん、岳飛と韓世忠・楊存中らの関係、兀朮と王氏の私通等、全く史書と異なる・史書に見えない設定もあるのだが、全體としては荒唐無稽をなるべく排し、史書に近づける傾向、忠孝節義の強調、現世における應報の強化など、「高級化」「規範化」志向の強いテキストと言える。

(2)『精忠旗』における岳飛の 忠義 の描かれ方は、『東窗事犯』、『東窗記』などとは異なる大きな特徴がある。

例 79 爲國愁添霜 雪、何時淨掃妖氛。(5【西地錦】)

例 80 我官已尊祿已厚矣。但一方雖然粗定、二帝未有還期。我身受國恩志存滅敵。(5 岳飛白)

例 81 捨命以報朝廷、何敢全軀而保妻子。(7 岳飛白)

例 82 憑義膽報君王、將熱血灑疆場。(15【嘉慶子】)

等に見られるように、(官位や祿ではなく)二帝を思い國恩に報ずる純粋な気持ちが強調されている点である。岳飛は夫人に北方に捕らわれた后妃らを思い、粗衣に換えるよう指示したり(5)、部下たちに、「例 83 你每端一塊地頂一片田、何處逃朝廷名分。穿一領衣喫一口飯、盡都是主上深恩。(哭介)如今試舉眼望二帝乘輿流淚隔萬重沙漠、開口問域中疆土傷心屬一片荒煙。」(7)と説き、さらに「二聖就是父母一般」として、仇を討つべきことを訴える。ここでは最後に、「例 84 只待直擣黃龍迎回二聖、那時圖形麟閣垂譽千秋。(7)」と部下を励まして結ぶのだが、重點はあくまで純粋に二帝や國土を思い、朝廷・主上の恩に報ずる気持ちを訴えることにあり、部下たちも「例 85 元帥忠義所激、人非木石、誰不敢〔感〕動」と感化されるのである。

朱仙鎮で班師の聖旨を受けた時(15)には(他のテキストにもまして)、二帝を思って涙し



(「我那二帝呵」「例86二帝二帝、臣飛一去不知乘輿何日還京也」)、勅使から「例87老先兒、開口就說二帝、二帝是大家的、難道是老先兒一箇人的」と皮肉られるほどで(「例88怎下得赤子肉填虎狼」(【二犯么令】)等、人民を思う気持ちも表出されるが、強調されているのは二帝である)、ついに班師するに際しては、二帝を遙拝し、陵寢を拜し、父老たちを先行させている。

こうした心情が、岳飛の部下や一般庶民にもある程度共有されているものとして描かれている点も注目される。班師の詔を受けている間にも兀朮が攻め寄せると、勅使は「朝廷只教太尉班師、不教出戰」と出撃を止めるが、部下たちが怒りだし、岳飛の躊躇を押し切って、「例89只待二聖還朝、方顯我將軍境外強」(15【品令】)と出撃して行く。また、土地の父老が岳飛らを引き止めることは史書や、ほかの戯曲・小説テキストにもあるが、その理由は、「岳飛らが来た時に我々が歓迎したのを金人たちは知っているから、彼らが戻れば皆殺しにされる」という、「我々を救けてくれ」という懇願である。『精忠旗』では、例90「我每情願跟著爺爺去殺兀朮、大家求見二帝一面、切不可輕回」「朝廷也是主上、二帝也是主上。爺爺縱不肯救我每百姓、也看二帝面上再住一住」「正宜趁此機會殺往前去、庶可即見二帝」と、二帝の救出を前面に出している。

また、岳飛は秦檜の奸計を知りながら縛に就くことになっており、その理由は、「例91我想皇天有眼、必不使忠臣冤陷。萬一不幸亦何所逃、我怎肯自家輕死。此行倘得聖還、尚要與國家報效。」(18岳飛白)と、あくまで忠義を盡くすことにある。「例92怕只怕國事從今不可爲(18【尾聲】)」、「例93國難何時已(20【虞美人】)」、とどこまでも「國事」を氣にかけている。取り調べの際は、

例94 我盡忠持正、...念二聖蒙塵常咽哽、把妖氛掃是我真罪名(20【香纒五更】)

と、自己の功業・盡忠の心と共に、二帝を思う気持ちを繰り返し述べ、供述書が捏造されると、

例95 盡忠報國無憑、忠心未盡身先喪、報國曾無一事成。并命歐刀何足惜、二帝呵、恨不見你雲車返故庭。(白) 秦檜秦檜、你若爲我一身一家的私仇、我何惜百口殞命以快你志。只怕我死了呵、(唱).....忍蒙塵二聖終付仇人。(20【學士解醒・其二】)

と、自分や家族が無實で殺されることより、報國の志が達成されず二帝が歸還できないことへの憤慨が述べられている。さらに、23は「獄中哭帝」の一齣で、「例96我岳飛自主辱國蹙以來、只要向前廝殺、豈圖貌畫麒麟、也知明哲保身。」(岳飛白)、「例97一事無成、萬死莫贖、欲作厲鬼殺賊。」(岳飛白)、「例98淵聖皇帝你在北地此時好不淒楚也。」(岳飛白)、「例99秦檜秦檜我岳飛呵、便粉身何惜覆全家、只可恨累君王常受波查。」(【瑣窗寒】)等と、二帝を思いやり、自分や一家の命は惜しくないが、君王を苦しめていることを恨みとし、死んで厲鬼となって賊を殺そうという心中を吐露している。また、岳飛の詩の引用「不問

登壇萬戸侯」(5)や、例96に見えるように、名誉欲も否定されている。

これらは、捕えられてから、或いは風波亭に連れてこられてから(風波亭は道月長老の偈の中の語と一致し、風波亭の名を見て岳飛は自分の死を悟る)「道月長老の言うことを聞いておけばよかった」と後悔し、無實と自分の功業とを訴え、秦檜の誅戮を要求する(『東窗記』、『精忠記』、『大宋中興演義』等の)岳飛の忠義とは大きく異なる。

## 2.6. 『續精忠』

(1)『古本戯曲叢刊』第二集影印清鈔本を使用巻首題「續精忠」。二巻二十五齣。湯子垂撰。莊一拂(1982)によれば、「約明崇禎元年前後在世」という。『傳奇彙考標目』著録。

岳飛・岳雲死後。兀朮が侵攻し臨安に迫る。朝廷で武將を召集すると岳飛(の靈)が名乗り出、金を退ける。高宗は趙逸修の言に従い、彼を嶺南に派遣して岳雷・岳電を江淮都統制として召還し、金に當たらせることにする(2~5)。趙逸修は、抱朴子について出家修行していた牛皋の庵に宿を乞い、容貌から牛皋と察して巧みに挑発し、將となることを承知させる(6)。牛皋は岳雷らに聖旨のことを話すが、岳飛夫人李氏は秦檜の奸計と疑う。牛皋はそれを聞いて怒り、嶺南王を名乗って自立する(7,8)。朝廷では韓世忠が矯詔のことを暴露し、秦檜は大理寺獄に下される。牛皋は夢で岳飛に叱責されて心を入れ替え、韓世忠から招安を受け、岳雷・岳電と共に臨安に上り、秦檜夫妻を勘問し凌遲處死と決する(9~13)。牛皋らは兀朮を退ける(14)。秦檜の子、秦禧が紹興王を名乗り亂を起し、牛皋らが征討に向かう。牛皋の妻、金氏が牛皋の消息を知らぬまま改姓させて育てていた子、馬通は、偶然のきっかけで秦禧に仕え、それまで連戦連勝していた宋軍に立ちはだかる。王貴の子王憲、楊再興の子楊延彪、湯槐〔懷〕の子湯穎、張保の子張英らが次々に敗れ、牛皋も敗れて捕えられる(15~22)。家に戻った馬通は金氏から牛皋こそ父だと教えられるが、これが秦禧に漏れて捕えられ、父と同じ獄に入れられる。かねて仇を討とうと秦禧の配下になっていた施全の子・施寛が獄中にひそかに武器を運び込み、牛皋らと共に宋軍の攻撃に内應し、秦禧を捕える(23,24)。牛皋ら諸將は官に封ぜられ、岳飛らにも追贈が行われる。趙逸修の二女は岳電・岳雷の夫人とされる(25)。

史書からは全く離れ、岳飛死後、現世で岳飛の仇を討ち秦檜夫婦(・子)を處刑するという枠組みで、兀朮ら金の侵攻は後景に退いている。牛皋と岳飛の子、岳飛配下の將の子らの活躍を描く點は、千田(1997)の指摘するとおり、後の『説岳全傳』に影響していると思われる。

(2)牛皋は、後の小説に見えるのとほぼ重なる個性の持ち主、張飛・李逵的な類型の人物として描かれ、李氏の疑いの言葉を事實ととって怒り、いったんは「例100把嶺南王旗立起來、買兵招馬、殺入臨安、誅了秦檜得成大事」(8)と自立する。李氏がそれは天理に反す

ると止めても、「例 101 我做了皇帝、你就是皇嫂、两个姪兒是皇姪了、豈不快哉」(8)と相手にせず、その後も、「例 102 一不做二不休、管什麼謀逆、表什麼忠貞」、「例 103 我如今自自在在做一个草頭黃〔皇〕帝」(11)、「例 104 我牛皋大王呵、獨占南州稱帝稱王、…指日山河一統、却佞除奸報伏前仇。(白)我若授了招安呵(唱)稱臣傳旨實堪羞。…不願名標青史、博得个萬年遺臭。(11【駐馬聽】)」と無邪氣に叛亂を自認・肯定し、韓世忠の説得にも耳を貸さない。ただ、その主眼は自由な生活と仇(秦檜)を討つところにあり、岳飛の靈に「例 105 你若決意叛逆、不惟上干天怒、玉石俱焚、就是我這精忠心性、怎容得你這里賊過。」(11)と叱責されればたちどころに「例 106 大哥、我再不敢造反了」「例 107 如今不做皇帝了、原做將軍罷」(11)と改まってしまい、そのまま韓世忠に招安される。牛皋の場合、心服する「あにき」についていって暴れ、手柄を立て続けた結果が「忠義」となり(であろう、おそらく)その「あにき」を失い、拘束を受けず仇を討とうと思えば「叛逆」となる。金と戦うからといって、『精忠旗』の岳飛のような「二帝を歸還させる」「中原を恢復する」といった「純粹な盡忠報國の心」から動いているわけではない(その方が自然だが。また、官位や禄への欲望からでもない點も留意されるべきだが)。歸順して金を討つ際も、「例 108 你鬪著俺英雄漢、好教你膽也寒。」(14【金字經】)と、自分の強さを誇る程度であり、それでも結果として「金を撃退した」「反亂を平定した」ことが「功勳昭著」「忠勇可加〔嘉〕」と評價される(25聖旨)。「動機より結果」主義的と言うことができよう。また、「造反 - 招安」の溝が浅く、簡単に往還できる(いったん「造反」しても、「招安」を受けて簡単に戻ることができる)と觀念されている點も注意を引く。

牛皋がそういう人物として描かれているのはある意味では当たり前なのだが、このテキストでは、岳飛にも(二回にわたって靈を顯わすにもかかわらず)やはり「二帝を歸還させる」「中原を恢復する」等への執着が見られない。牛皋を叱責に向かう際の、

例 109 前因金兵壓境聖上驚慌、是小聖陰空助力、聖上追襲忠良、今將有報仇雪恥之日了、耐牛皋逆命、連累我子幾負不臣之罪。(11)

という獨白からすると、二帝のことなどどうでも良く、自分の名誉と自分の子が大事なのかと勘ぐられかねないところである。『續精忠』は『精忠記』と近い時期に書かれ・流傳したと推定され、地域的にも、ともに蘇州を中心とした江南地域(『續精忠』には大量の蘇白が含まれる)と密接な関係があるが、岳飛が懐いているとされる「忠義」の實質には相當の開きがあると言えよう。

## 2.7. 『奪秋魁』

(1)『古本戲曲叢刊』第三集影印清雍正鈔本を使用。郭英徳(1997:674)に據れば北京大學圖書館藏清平妖堂鈔本という。不分卷二十二齣。また、清初永慶堂鈔本(二十四齣)が中國藝術研究院戲曲研究所に所蔵されると言うが未見。ただし、これを排印し、前者と校勘

したものが『岳飛故事戯曲説唱集』(上海古籍出版社、1985)に収められる。朱佐朝撰。『新傳奇品』、『曲考』、『曲海総目提要』著録。

岳飛はもと緑林好漢の王貴・牛皋と義兄弟となり、武學を受ける。出立に当たり、岳飛は母の姚氏に頼んで「盡忠報國」の刺青を入れてもらう(2~5)。小梁王柴榮は武状元を奪おうとするが、岳飛が試合で柴榮を打ち殺し、死罪とされる(8~11)。刑場で姚氏が監斬官の宗澤に訴え、試合前に交わした生死文券が證據となり、死刑を撤回して楊么征討に当たらせることとなる(12)。崔縦は洪皓と共に金に出使し、毅然とした態度を貫いたため冷山に抑留される。同行した秦檜は卑屈な態度で取り入り、瓦里布と密約して、瓦里布に捕えられていた王氏と共に南歸する(6)。秦檜は崔縦は金に降ったと讒言して娘の崔蓮姑を捕えさせ、宣城知縣呂中原に取り調べさせるが、酔って衙門に入り込んでいた牛皋が、以前銀子を恵んでくれた人物だと気づき、暴れて助け出す(13~15)。岳飛・牛皋・王貴は楊么を平定して凱旋し、岳飛は武學の試験官張世瑋の娘と、牛皋は崔蓮姑と結婚することになる(16~22)。

岳飛・牛皋(・王貴)の出身傳であり、骨組みは『説岳全傳』に繼承されている。

(2)この劇では、岳飛らがまだ世に出る前であり、武學に臨むということもあり、母の姚氏はじめ岳飛らも、「功名」「封侯」を目標として掲げている(「例110 圖功名事成」(2【朱奴挿芙蓉】王貴唱)、「例111 意欲圖個進取顯耀雙親」(4岳飛白)、「例112 一布英名四海、眼看看拜將封侯。惟願取疆場奏凱、有願得民安國泰。」(5【勝如花】))。柴榮を打ち殺し、死刑と決まると、「例113 我兒呀、指望你來求取功名、有個出頭之日」(10姚氏白)、「例114 滿望利名奢、又誰知惹起冤和孽。」(12【步步嬌】岳飛唱)と嘆くことになる。楊么を討つに際しては、「例115 生平懷志覓封侯」(17【一剪梅】王貴唱)という言い回しでやる氣を示す。素朴な功名・封侯への志向が(水寇楊么平定という結果を生む)忠君の志の強さとしてそのまま肯定的に扱われている。

尖鋭的・観念的な「忠義」は、むしろ行人(金への使者)崔縦に表れている。(崔縦出使は史書にも見え、〔熊〕(3-22)に(その辛苦と忠義を強調する内容の)物語があるが、細節はこの劇とかなり異なる。なお「洪皓使虜記」が『南詞叙録』「本朝」に著録されている)。出發に当たって、「例116 我想金人狡猾必將南使磨滅、我若見難推辭、豈是臣子事君之禮」(3)と困難を予測し、娘の蓮姑に止められても「例117 我在朝堂食祿、當艱辛碎鞠躬」(3【江頭金桂】)と説き、「例118 爲人臣者見難思義爲國亡家。…我若畏避湯火、貪生利祿、豈是臣子事君之道。況我在此誓必竭盡肝膽、不得二帝消息決不南歸。」(3)と二度と會えぬ覺悟で金に向かう。金に至って、「例119 你我此去必須忠肝義膽、不要威懼於他纔是」(6)と同行の使者に呼びかけ、金の無禮な扱いに唯々諾々と従う秦檜・湯世成に對し、洪皓と共に毅然とした態度を貫き、抑留されて冷山に移されることとなり、雁回嶺で「二帝が五谷

〔國〕城で崩じたと知り」、断崖から身を投げて自殺する(19、宗澤が手紙の内容を崔蓮姑に伝える。なお、〔熊〕では崔縦は冷山で病死したとされている)。ここでは、「爲國亡家」、國が「家」に優先すべきものとして語られている。

## 2.8. 『牛頭山』

(1) 『古本戯曲叢刊』第三集影印清鈔本を使用。巻首題「牛頭山総綱全集」。李玉撰。『新傳奇品』、『曲考』、『曲海総目提要』著録。

岳飛は、宗澤から推薦されて東京留守を務め、王貴に劇盗王善・李成を招撫させるが、親征を懇請した上奏文が原因で解任され、河北招撫使張所の旗牌とされる(2)。代わって東京留守となった杜充は無能で、兀朮が侵攻するとすぐ投降し、兀朮は南侵して江表に迫る(6,7)。高宗らは宮廷から逃げ、張娘娘(皇后)ははぐれてしまい、宮女劉翠華の實家に身を寄せる(8)。高宗は黃潜善と共に太湖で李俊らの助けを受け、明州に逃げる(9)。黃潜善は、妻の嚴氏の白雲山の庵に高宗を置いて兀朮に注進する。嚴氏は高宗を逃がして自刎する(10)。岳飛・牛皋は張所の命を受けて高宗を迎え、張所が予め糧草を備蓄しておいた牛頭山にこもるが金軍に圍まれる(12,13)。岳雲は山中で九天玄女に会い、その指示で滄海君から銀槌法を授けられる(14)。また、楊么の亂のため張皇后らは湯陰縣の岳飛の家に身を寄せる(15)。岳雲は糧草の督促の歸りに湯陰縣に寄った牛皋から消息を聞いて牛頭山に向かうが、誤って蒲州解良縣の牛頭山に行ってしまう、途中、金將となっていた杜充を殺し、鞏金定と戦って婚約に至り、教えられて湖廣界の牛頭山に至り、金兵の圍みを突破して父に會う(17~20)。高宗は韓信の故事に倣い岳飛を登壇拜將し、翌日、岳飛らは金軍を大いに破り、圍みを突破して、張浚ら七鎮の軍馬と合流する(21,22)。兀朮は部下に湯陰縣に岳飛の家族を捕えに行かせていたが、先に岳雲から依頼され湯陰縣に来た鞏金定が張皇后・李氏らを救う(23)。鞏金定は張皇后・李氏を護衛して臨安に至り、岳飛らは厚く賞される(24,25)。

これも史書と大きく異なる物語であり、『説岳全傳』はじめその後の通俗文藝に影響の大きい作品である。『東園記』、『精忠旗』のような岳飛の「忠義」は、いくら強力で純粹であっても、「二帝への忠義ではあっても高宗にとってはありがた迷惑だ」という批判(例えば「例120 況既有主上又要二帝何用」(『精忠旗』6万俟卨白)、「例121 他心心要把二帝迎還、却置皇上於何地、皇上因此與他不合、不專是我秦檜主意。」(『精忠旗』36 秦檜白))に完全には對抗できない(『精忠旗』では、高宗下賜の精忠旗が、高宗も岳飛の行動を嘉していた證據とされる<sup>20</sup>が、いかにも弱い)。これが、高宗にとって岳飛が大恩人であるような物語として「牛頭山」故事がふくらんでいった一因かもしれない。

(2) 『牛頭山』では、岳飛ら諸將が皇帝・「邦家」・「宗廟」の防衛・安定のため、身を捨て

て金と戦う志が繰り返し述べられる。岳飛が張所から、高宗を探し迎え取るよう命ぜられ、「例122 拼得个殺身圖報。……懷忠孝非關浪叨、管指日安宗廟」(12【朱奴兒】)と誓う、兀朮に追われる高宗を迎え取ろうとする牛皋が「例123 只爲着救主心切、跳澗威風賽過敬德雄傑。」(13【江兒水】)と唱う、岳雲が九天玄女に自らの志を「例124 報君恩誓雪邦家恥、效親心協掃烽煙熾。」(14【江兒水】)と述べる、牛頭山で決戦を前にして諸將が「例125 報國精忠血滿腔、瀨氣高千丈。那傾 = 乾坤、喪亂邦家、紛擾煙塵、顛躓君王。」(21【傾盃賞芙蓉】)、「例126 願共作長城萬里保封疆」(21【普天插芙蓉】)と唱う、等である。また、敗れた兀朮を追いつめ、逃がして欲しいと頼まれた岳飛、「例127 疾速的輦還妃后、送轉臣僚。兩京歸宋、二帝還朝。才放你兇悍殘生歸故巢。」と要求する場面も見られ、劇の終わりでも中原に進撃する意圖が繰り返し述べられている。

さらに、岳飛自身は、「例128 長戈挽掃清區宇、何必畫凌煙。」(2【滿庭芳】)と、名誉欲も否定しており、盡忠報國の志の純粹さが強調されている。しかし、岳飛が歸降した王善・李成を「例129 從此破敵成功封侯受賞」(3)と励まし、刀門をくぐる儀式の後、諸將が「例130 二聖回鑾輦、早圖形麟閣。」(3【千秋歲】)と唱う、張所が岳飛らを「例131 看取功成一戰麟閣名標」(12【催拍】)と励ます、など、部下の諸將たち、或いはそれを励ましたり讃えたりする場面で「名誉が得られる」と述べることは(當然ながら)特に避けられてはならず、忠義をより強力に勧める言い方として位置づけられていると見ることができる。

## 2.9. 『如是觀』

(1) 『古本戲曲叢刊』第三集影印清鈔本(郭英徳:1997:553に據れば、中國藝術研究院戲曲研究所藏馬子元鈔本という)を使用。巻首題「如是觀」。二巻三十齣。鈔本巻上の末に「康熙伍拾參年孟秋録」とある。また、環翠山房十五種曲本がフランス國立圖書館に所蔵されるという(郭英徳:1997:553)が、未見。張彝宣(一名大復)撰。『今樂考證』、『新傳奇品』、『曲考』、『曲海總目提要』著録。

欽宗は奸臣を信じて北の備えをせず、金に侵攻される。汴京が陥落して欽宗は金營に赴くが、扱いはひどく、憤激した隨行の李若水は金人を罵り殺される(2~6)。宗澤は國を憂え病となり、配下の岳飛に兵權を託して亡くなる(8)。岳飛は老母を慮って重責を負いかねていたが、逆に母に叱責され、精忠報國の刺青をされる(9)。金營に捕らわれていた秦檜夫妻は富貴を得るべく「身在南朝心向北」の計を行う。まず王氏が兀朮に近づいて寵愛を受け、秦檜もとって信用を得た後、細作として宋に歸還する(7~13)。北狩の途中太后・皇后は自殺し、徽宗・欽宗は五國城に送られる(11,14)。岳飛が連戦連勝したため、秦檜は北征を促す詔書に代えて班師の詔書を偽造し、王氏から兀朮宛の手紙と共に腹心の田思忠に持たせるが、手紙を持った家丁が牛皋に捕えられ、陰謀がばれる。岳

飛は田思忠を斬ってさらに進軍し、和議を乞われても拒絶する(15～21)。岳飛の家族は捕えられるが、李綱が家族の命を懸けて諫争し、十日の猶予を得る(19,20)。逃れた岳雲は兀朮の鐵浮圖を突破して父のもとに至る。岳飛は、秦檜の家將戚方が岳飛を暗殺しようとしたのを逆用して噂を流し、眞に受けた兀朮が攻撃するところを打ち破り、北海の岸まで追いつめる。鮑方は天帝の命により兀朮に北海を渡らせ、異獸を降して宋軍を遮る(24～26)。岳飛は五國城で道士姿の二帝を探し出し、護衛して宋に凱旋する。聖旨により、秦檜夫妻は岳飛・李綱に勘問されて凌遲處死とされ、岳飛らは高位に封ぜられる(27～30)。

「岳飛がもし班師しなければ」という仮定で書かれた荒唐無稽な「IFもの」で、現世で勸善懲惡の結末がつき、カタルシスを得られる構造になっている。そのためか、地方劇等、後世への影響の大きい作品の一つである。

(2)『如是觀』では、我が身・家を顧みず、盡忠報國することを随所で稱揚している。

例132 岳飛は老母を思い、宗澤から託された重責を引き受けかねる思いでいた(「孩兒欲奮志勤王、恐違孝道」、「孩兒今欲養親行孝尤恐有負于朝廷、欲盡忠報國又恐貽憂于母親」)。すなわち、朝廷への忠と母への孝が對立し、兩立しないという恐れである。岳飛の母魯氏は、「報君恩立志揚名于世、豈因小節失大機。論君親要識高低、古人云爲國忘家、那曾有公後先私。【粉蝶兒】」「自古君親本是一體、...今君父有難、爲人臣者不鞠躬盡瘁可爲忠乎。」「君父有難陷入虜廷、當此國破家亡、正是你立節揚名以顯父母、你怎麼反把我藉口、你事君不能盡忠、事親焉能盡孝你？不忠不孝、非吾子也。」と叱り、妻の張氏も、「妾聞公而忘私、國而忘家、婆婆以節義自持、相公當忠良爲重」と述べて、家庭のことを全てを引き受けると請け合う。魯氏は岳飛に「精忠報國」の刺青を施し、「你此去雪不得國家之恥、迎不得二聖還朝、你再休想來見我。」と厳しく言って送り出す。

すなわち、「君／親」「國／家」は「高／低」「大／小」「公／私」に對應し、當然のこととして前者が優先すべきであると説き、同時に「本是一體」であり、忠をなすことで名を揚げれば父母も顕彰され(結果的に孝も實現す)ると説く。「當然のこととして君が優先する」かどうかの境界線は、「例133 你不曾出仕乃父母之身、今既受職乃朝廷之身也」からも明らかのように、官の有無、禄を食んでいるかにある(この論理は種々のテキストに頻見する)。魯氏ははじめ岳飛を迎えて「例134 做娘的不圖鼎食三牲富、爲願芳名千古知」と、富貴を望まず名譽を望むという姿勢も明らかにしている。

こうした姿勢を受け、岳飛も、部下を督励して「例135 罪有罰有功重賞、博得个麟閣名上」(15【馱環着])と言う箇所はあるものの、自身の出世や封侯など考えず、「例136 衝冠怒髮忠心壯、誓圖恢復皇恩高」(15【引])、「例137 感皇恩浩蕩、念及封疆、...報國精忠停

想。」(15【馱環着])、「例138騷〔臊〕羯狗、我岳飛奉天子之命恢復兩京迎回二聖、我誓必殺盡你每這班胡囚」(15)、「我岳飛以死報國」(18)と純粹に皇帝を思い報國する気持ちを述べ、朱仙鎮で田思忠を斬った後、部下から「戻って弁明しなければ秦檜に讒言されて反叛の名を着せられ、家族が捕えられて巻き添えを食う」と言われても、「例139我一身既以許國、那私情怎敢亂心田」(18【錦衣香])と動じない。

他にも、8では宗澤が強烈で純粹な「爲國」の心を述べている(というより、そのためにこの齣が書かれたと思われる)。

例140憂國のあまり病に倒れた宗澤は、「我宗澤老邁病篤、不能勾瞻天仰聖爲國報仇了。」、「我除死做厲鬼遊魂、我殺殺賊還。」(【紅衲襖])と、壯烈な執念を見せ、岳飛らに「公等當思忠義、爲國報仇」と諭し、岳飛に「須要爲國報仇掃盡金酋迎還二聖、此一節大事全仗與你」と託し、何度も(史書に見える句)「渡河殺賊」を叫んで亡くなる。

岳飛や宗澤だけでなく、『如是觀』では、牛皋らまでもが「例141一心爲國迎取蒙塵二帝」(17【四邊靜])といった句を口にする。

『如是觀』では、功名や官位への欲などからみあい混じりあった忠君でなく、金を討ち二帝を歸還させ失なわれた封疆を恢復しようという「純粹」な気持ちが強調され、それはしばしば「爲國」「報國」等の言葉で表現される。

### 3. 『説岳全傳』 二十卷八十回

(1)『古本小説集成』第四批所収影印錦春堂刊本を使用。巻首題「増訂精忠演義説本全傳」。巻首に序があり、その末尾に「甲子孟春上浣永福金豊識於餘慶堂」と署し、目録のはじめに「仁和錢彩 錦文氏編次 / 永福金豊 大有氏増訂」とある。この書は乾隆年間に禁書となっている(王利器:1981[1958]:51)ので、それ以前には成立していたことになる。

『説岳全傳』は〔于〕とは對照的に、史書にない、岳飛及び牛皋ら諸將の出身譚や、六十二回以降(岳飛死後)の岳家小將の物語(北伐、金の降服に至る)、『西遊記』、『封神演義』ばりの神怪譚等を豊富に含む英雄傳奇で、文體もたいへんこなれた白話であり、かなり「通俗的」と稱しうるテキストである。千田(1997)は、この小説が『續精忠』や、『牛頭山』、『奪秋魁』、『如是觀』など蘇州派傳奇の内容を繼承していることを論じている。

古典文學出版社が同治刊本を底本とした排印本を刊行しており(1955)、中華書局(1963)、上海古籍出版社(1979)等がこれを重排・重印している。上海古籍出版社排印本と錦春堂本と比較すると、罵詈や異民族関係の語句がまま異なっており、(底本を見ていないので断言はできないが)恐らく底本と錦春堂本の差というより、排印の際にある種の教育的・政治的配慮から「校訂」されたものと思われる。

亦凡公益圖書館(<http://conv.yifansoft.com>)に電子テキストが公開されているが、恐らく



こうした排印本に據っていると思われ(筆者が把握している錦春堂本と上海古籍出版社排印本との相違については、後者に一致している)、校正も完全とは言い難いので、補助的に参考にするにとどめた。

(2)『説岳全傳』では、諸將が知り合い、結義し、岳家軍に加わっていく様子の描寫、戦争の場面における一騎打ちや作戦面での興味など、娯樂的な要素が前面に出ているため、岳飛の忠義を強調する箇所は決して多くないが、以下のように要所要所に見える。

例142楊么麾下の王佐が、岳飛に近づいて義兄弟となり、楊么の「聖旨」を受けさせて仲間に入れようとする。岳飛は「生是宋朝人、死是宋朝鬼」と言って毅然として断り、義兄弟のよしみで官には突き出さなかったものの、泊まらずに歸した。話を聞き母親の姚氏は岳飛の背中に「精忠報國」の刺青をする。(22)

例143李綱のもとにいた張保は、その勧めで岳飛のもとに投ずるが、岳飛はやはり李綱の元で出世をめざすよう勧める。張保は岳飛の食事が質素なのを見て家人に尋ね、岳飛が食事のたびに泣いて「爲臣在此受用了、未知二位聖上如何」と言う聞き、居残ることを決心する。(23)

例144牛頭山での勝利の後、高宗は臨安に都することにし、李綱とともに岳飛は諫めて「積草屯糧、召集四方勤王兵馬、直擣黃龍府、迎還二聖以報中原之恨」と上奏するが聞き入れられず、母の看病のため暇をとる。(45)

例145岳飛は朱仙鎮から班師し、歸途金山寺で道悦に會う。道悦は岳飛の夢を解き、牢獄の禍を予言し、江湖に身を隠すよう勧めるが、岳飛ははじめ信じられず、道悦にさらに説かれても「但我岳飛以身許國、志必恢復中原、雖死無恨」と言ってそのまま臨安に向かう。(59)

例146臨安に入る前に馮忠・馮孝が聖旨を奉じて岳飛を捕える。岳飛を守ろうとして馮忠に抵抗しようとした王横に、岳飛は「此乃朝廷旨意、你怎敢羅喲、陷我不忠之名。」と言って自刎しようとする。馮忠は王横を斬ろうとし、王横が立ち上がろうとすると、岳飛は「王横、不許動手！」と命じ、王横は再び跪いてそのまま馮忠に斬られる。(60)

例147岳飛の死を知り、施全・牛皋らは臨安に押し寄せて岳飛の仇を討つことにする。長江を渡ろうとすると、天に岳飛らの靈が現れ、岳飛は施全らにやめるよう身振り以示し、牛皋がかまわず船を進めようとする、大波が起きて船が轉覆する。岳飛が復讐を許さないのを知ると、余化龍、何元慶は自殺し、牛皋は長江に身を投げる。施全らはやむなく引き返し、一部の將兵と共に太行山に落草する。(63)

万俟卨の取り調べに對しての岳飛のせりふ、「招状」は、〔熊〕の例10をややアレンジしたものであり、自己の功業と二帝歸還への志を述べ、無實を主張し、權奸を批判している

點は同様である。『説岳全傳』では、『精忠旗』ほどの強烈さではないが、岳飛の二帝を思い中原を恢復するという目標、一身の死を恐れない志が示され、富貴・功名を目的とした「不純」な要素は稀薄である。また、例146、例147に見るように、義兄弟ないし配下の命より忠を守る方が優先されている。

## 4. 忠義 と 國家

### 4.1. 忠義 の「純粹」化

まず、「2」、「3」で見てきた、岳飛らの 忠義 について整理しておく。

『東窗事犯』や〔熊〕など、古い時期のテキストにおいては、岳飛は自己の功業を誇り、高く評価している。下獄したときの岳飛の嘆きは、「これほど大きな功績を立て、何の罪もない自分がこんな目に遭うとは」という嘆きである。〔熊〕は、一方では、岳飛が上官や部下に向かって志を吐露する場面があり、「恢復中原」「迎還二帝」をめざしていることが語られているが、『東窗記』、『精忠記』、『精忠旗』と、時代が下がり、作者・受容者層が高いと推定されるテキストになるほど、この「純粹」な 忠義 の動機が強調され、下獄した岳飛は、自らの功業を誇るのではなく、中原を取り戻し得ず、二帝を救出し得なかったことを恨み、二帝が北地に残されたままになるのを嘆くことになる。〔熊〕を文人化・高級化したテキストである〔于〕が例13の句を加えているのも、同じ方向の改變と言えよう。

また、自分の功績の大きさへの自信から道月の予言を信じられずに臨安に向かい、捕えられるという設定から、自分が陥れられることを予測した上で、生きて戻って再び國家に盡くす爲に敢えて逃げずに縛に就くという設定への變更も、岳飛の 忠義 の純粹さを強化する。

こうした傾向は、特に『精忠旗』において突出しており、他のテキストにおいては當然とみなされている、朱仙鎮で班師の詔を受けた時の岳飛の躊躇を、「詔が偽」という疑いがあつたことであると「辯解」を加えているのも、「眞の詔に即座に従わないのは 忠義 を傷つける」という、 忠義 のハードルが高い位置に設定されているためと考えられる。

### 4.2. 「富貴」の排除 / 「以死報國」

『東窗事犯』での岳飛は自らの出世欲・名譽欲を隠さず、封侯・官爵を望んでいた（受けられるはずだと考えていた）こと、そうした欲望のため秦檜の罠に引っかかったことを自認している。封侯・官爵への欲望は、岳飛の功績や 忠義 を傷つけることでは全くなく、むしろそれを強調するものとして肯定的に位置づけられている。『東窗記』でも、功名・封侯を望んでいることが示される。〔熊〕においても、岳飛が自身の富貴への欲望を

表出することはないものの、部下を督励し盗賊を招安する場合において、「封侯」「富貴」を持ちだす場面は頻見し、封侯・富貴を目的とした「不純」な忠義でも、良きもの・奨励されるべきものとして読者の前に立ち現れる(こうした言説は岳飛ものに限らず広く見られる)。

これに對し、そのほかのテキストには、岳飛らの出世欲・名誉欲を薄く描く傾向、特に「富貴」「封侯」「官爵」など具體的・現世的・物質的な欲望を連想させる語を排除する傾向がある。「功名」が「名」と「富貴」に分割され、前者への欲望は認められるが後者への欲望は否定されると言うのかもかもしれない。宮廷で演ぜられた『岳飛精忠』や、『牛頭山』、『如是觀』にこうした「分割」が見られ、『精忠旗』に至っては、(部下を督励する場合はともかく自分については)例96のように「名」への欲望も否定されている。(『奪秋魁』は、岳飛らが世に出る前を扱っていることもあり、未分化な「功名」への欲望が表出されている)。小説でも、〔鄒〕は〔于〕ほどはっきりしないが、〔熊〕の例11「値取功名富貴之秋」を削除する等の例があり、〔于〕に至ると、肯定的人物が「功名」「富貴」を欲望する(あるいはそれで部下や盗賊をつる)語句を削除する傾向はかなりはっきりしている。

そして、排除された「富貴」は、秦檜夫婦や黃潜善、杜充など、否定的人物の懐く欲望として、また盗賊や金が歸降を誘う時の決まり文句として提示されることになる。

これと表裏する現象として、「身を捨てて」「死を賭して」報國する意志を表出する場面が、時代の降った、或いは作者・受容層が高いと推定されるテキストにおいては頻見することが挙げられる。『岳飛精忠』では「赤心報國」「捨死亡生」が見える程度、〔熊〕も(韓世忠の語や劉子羽の遺書、趙鼎の上奏文等に)「死報國家」「以死報國」が散見する程度だが、『東窗記』では、「赤心報國」「赤心報主」「捐軀報國」、『精忠旗』では「赤心迎二聖」「捐軀報國」や、「例148 必須各自拼性命拼身家、方顯得軀銅肝鐵膽」(7岳飛白)、「例149 憂國一身輕」(7【尾犯序】)、『牛頭山』では「例150 拼得个殺身圖報」(12【朱奴兒】)、「例151 岳飛爲國忘身忠君致命」(25聖旨)、『如是觀』では、「一身既以許國」「粉身圖報」「以死報國」「例152 惟其一死上報朝廷下答元帥」(8)、「例153 此身誓死滅金酋」(21)、「例154 他死忠自許、喪其身要與國家少補。」(23【三段子】魯氏唱)、「例155 我岳飛但知有君不知有身」(24)が見え、(『續精忠』、『奪秋魁』を例外として)おおむね時代が降るにつれ過激化していることがわかる。岳飛ら肯定的人物の忠義からは、「富貴」や「封侯」を目的とした「不純」な要素は排除され、「純粹」な、我が身(や家族)を顧みぬ忠義として立ち現れることになる。

#### 4.3. 「忠孝豈能兩全」

また、これと關連した現象として、忠と孝、國と家とが「兩立しない」對立關係にある

とし、その上で「忠」「國」を選ぶ(「爲國亡家」)、という表現が、時代の降った・或いは高級と推定されるテキストに見られることが挙げられる。

岳飛故事を扱う通俗文學作品(特に古い時期のもの)では、基本的には、「忠孝」を一體のもの(或いは「忠孝」がほぼ「忠」の意)とする言説の方が一般的である。『東窗事犯』には「岳飛忠孝」「忠孝鬼」(1)、『岳飛精忠』には、「奸臣賊子無忠孝」(1【金盞兒】)と秦檜を批判する語があり、〔熊〕には、張浚や周三畏が「岳侯忠孝人也」と言う(5-42、7-65)、王氏が秦檜に「岳飛忠孝心切」と言う(7-58)、『東窗記』には例48や周三畏が「岳將軍忠孝兩全」(18)と讃える、等が、『續精忠』には「忠孝全家」(2【降黃龍】)、「盡忠孝」(12【朱奴兒】)等が、『奪秋魁』には、岳飛が「例156忠孝出乎一體」(4)と言って刺青を入れるよう頼む、姚氏が刑場に斬り込んで岳飛を救うと意氣込む牛皋に、「例157我孩兒一生忠孝、天人可表。…不可背義而生。」(10)と言って止める、等が、『牛頭山』には、例122や、張皇后が「例158人人盡說相州湯陰縣岳飛住處並無盜寇、況他忠孝著名」と考え岳家に身を寄せる(15)等が、『如是觀』には「例159我岳飛清白傳家忠孝自許<sup>21</sup>」(24)等が見える(また、前近代の中國では、忠孝一體、ないしは孝が忠に優先するとする言説の方が一般的とされている)。

また、「家」「國」も「國家」を指す一體のものとして使う用法の方がずっとありふれている。『東窗事犯』には「於家爲國」「亡家敗國」等が、『東窗記』には「於家爲國」、『精忠旗』には「爲國爲家」が見え、「國破家亡」もよく見られる語である。

それに對し、『精忠旗』では李若水が「你那里曉得忠孝豈能兩全、我如今顧不得家了」(3)と蒼頭に言って金將を罵り殺される、『奪秋魁』では、例118に見えるように、崔縱が「爲國亡家」の語を吐いて金に出使する、等が見え、また『如是觀』では例132に見るような忠と孝の兩立に悩む岳飛、忠が當然優先であると叱咤する母、という圖が出現することになる(宗澤が岳飛に兵權を託した際も「爲人的忠孝怎能勾兩全」(8)と言っている)。兩者を對立したものととらえ、「國」を「公」として當然のこととして優先する、という發想は、岳飛故事の通俗文藝の中では比較的新しいものであり、決して主流ではなかった。

以上、4.1. ~ 4.3. はいずれも 忠義 の「純粹」化としてまとめることができよう。「純粹」度はおおむね、時代が降り作者・受容層が高くなる(と推定される)ほど上がり、『精忠旗』、『如是觀』などが最も高く、成立時期の新しい作品の中では『續精忠』、『奪秋魁』が(扱っているストーリーの性格も一因だろうが)比較的低い、ということになりそうである。

ところで、『説岳全傳』は、成立時期は恐らく乾隆頃で、今回検討対象としたテキストの中では最も遅いと推定され、一方、受容層は他のテキストより下層に及んでいるように思われる(ストーリーは荒唐無稽で史實から外れたフィクションを多分に含み、文體はこな

れた白話)が、そこでの状況はどうだろうか。

確かに、物語の面白さ、娯楽性に重点があるので、『精忠旗』のように、しつこくどく 忠義 を強調することはない。しかし、「迎還二帝」「恢復中原」はそれなりに繰り返され、岳飛は「封侯」「富貴」への欲望をそれほど見せず、禍を予期しながら敢えて臨安に向かい、「赤心爲國」「爲國捐軀」「捨身爲國」「以身許國」といった語も見える。また、自分の身を守ろうとした王横に勅使に抵抗せず斬られるよう命じ、その靈は残された諸將(義兄弟)たちが復讐することを許さず、余化龍・何元慶・施全らはそのために亡くなる。ストーリーの荒唐無稽さに比して、意外に「純粹」度が高く、「規範的」とは言えよう。

#### 4.4. 忠義の「述べ方」

ここまで、「我々が 忠義 の語でまとめうるようなこと」をとりあえず 忠義 と記してきたが、諸テキストの中で用いられている叙述の仕方はそれぞれに異なる。冒頭で『忠君愛國』の英雄、岳飛」と述べたが、実は、今回検討対象とした諸テキストでは、現在岳飛について常用される「忠君愛國」の語は非常に稀で、岳飛を讃える語としての用例は見つからないのである(見落としがあるかもしれないが、頻見するものでないことは確かである)。

『東窗事犯』では、「忠義」「盡忠報國」のような抽象的なスローガンが少ない。先に挙げた「忠孝」や、せいぜい「於家爲國」「與國家出力」くらいである。それより、例16、例17、例19～例22のように具体的な功績を列挙し、「扶立高宗旺」「扶持的帝業興」「扶一人立爲帝」「臣海外收伏〔復〕了四百州」「保護的山河壯」という結果を強調する、という述べ方を採る。

それに對し他のテキストは、上述のように、「恢復中原」「迎還二帝」「雪國恥」といった目標を掲げ、「純粹」な動機・心を強調する。その傾向は時代が降るほど・或いは作者・受容層が高い(と推定される)ほど強くなる。

「純粹」な動機・「心」を強調する際に用いられる語彙は、テキストによって微妙に異なる。「盡忠」などはわりあい廣く見られるが、「赤心報國」は『岳飛精忠』、『東窗記』に目立ち(『東窗記』には「赤心報主」も見られる)、その他のテキストでは少ない。「精忠」は、なぜか『岳飛精忠』の正文にはなく、〔熊〕でも後人の讃・詩・評論等以外は「精忠旗」「精忠廟」のみであり、『東窗記』、『精忠旗』、『續精忠』、『如是觀』など、南戯・傳奇に目立つ(岳飛の刺青は、史書・〔熊〕・〔鄒〕・〔于〕・『東窗記』、『精忠記』、『精忠旗』では「盡忠報國」であるが、『奪秋魁』、『如是觀』、『説岳全傳』では「精忠報國」になる)。「忠義」も廣く見られるが、〔熊〕では「懷忠義」「忠義心」「忠義之志」「激以忠義」「勉以忠義」「例160 感國厚恩當施忠義」(3-24、岳飛が部下に)等、「心」の持ち方やそこから出る行動に関わる表

現も多いのに對し、『東窗記』以降の南戲・傳奇では、「誣陷忠義」「殘害忠義」など、「岳飛ら忠義な人物」という名詞用法(〔熊〕にももちろん見えるのだが)が多数を占めるなど、用法に微妙な差異が見える。4.2. で述べたように、「身を捨て」「死を賭して」報國する、といった表現も、新しい・或いは高級と思われるテキストに偏っている。

『東窗事犯』のような「述べ方」は、金を破り賊を平らげた功業・帝を「扶立」した功業それ自體の中に(當然のこととして)忠義は内蔵されており、まるごと肯定・稱賛の対象となりうる、といった認識であれば肯定的に受け入れられると思われる。時代が降るにつれて「純粹」な動機、行動の原動力となる「心」(その表現もまたテキストごとに微妙に異なるが)が強調されることによって、功業はその「動機・心」と「結果」とに分割され、「動機・心こそが重要であり、結果は問わない」「高い功績でも、功名富貴を目的とした『不純』な動機によるものであれば評價しない」といった「動機主義」「純粹」志向を強めることになる。この傾向は、明末の思想的風潮と方向性が重なっていると思われる。

#### 4.5. 「皇帝」・「國家」の突出

『東窗事犯』では「皇帝を立てる」といういささか「不敬」な言い回しや、例23のような皇帝に関わる不祥な語が、岳飛のせりふ・曲辭として述べられている。〔熊〕においても、例1の、「取天下如反掌」という言い方は、些か不穩であるし、宗澤が開封への還駕を要請して退けられた際、岳飛が宗澤に高宗を評して、「例161主人全不知我住他亦住之理。駕在揚州虜寇亦到揚州、…一到海濱彼亦隨至、駕所到處即爲邊岸」と言う(2-12)のも、南宋の末路を暗示しており(岳飛の先見の明を示すという趣旨だったかもしれないが)不吉・不祥の言である。例1は〔于〕では「取故疆」と改變され、例161は〔鄒〕〔于〕いずれも削除している。また、〔熊〕で、岳飛が後に孝宗となる皇子に謁見して喜び、家人に問われて「例162適見聖天子、社稷得人矣」と言う(6-48)箇所を〔于〕で「適見皇太子、社稷有主矣」に改變しているのも、現に高宗がいるのに皇太子を「聖天子」と呼ぶのが不敬ということなのであろう。<sup>22</sup>

以降のテキストでは皇帝を「立てる」という言い回しは(肯定的に扱われる人物の口からは)絶えて出ず、「報君恩」「報國」といった語に取って代わられる。上述のように〔熊〕の例も、〔鄒〕〔于〕においては「矯正」される。

また、〔熊〕3-27で、岳飛に矢を射かけ、逃亡して盜賊となった戚方が征討を受け、張俊に投降し、張俊は許そうとしたが、岳飛が事情を話し戚方が自分に射た矢を示すと、張俊も、「例163汝既叛主將、復爲盜賊」と怒り、岳飛に處分を任ず、という段があり、7-66の岳飛の「招詞」でも、「例164戚方本吾家叛將」の句がある。〔于〕は例163を削除し(例164は「招詞」全體を削除)ている。もちろん、主將に反することは朝廷に反することであり、岳飛も張俊に「例165背了朝廷反將出去」(〔熊〕3-27)と説明してもいるが、〔熊〕

では「主將に叛す」という言い方が許容され、〔于〕では許容されないのは、「叛」するのはあくまで「朝廷」「國家」に對してととらえるべきだ、という基準があるからだと思われる（また、例 164 の「招詞」は、『説岳全傳』が引いているが、この句を、「戚方本國家大盜」<sup>(6)</sup>に作っている）。同様の例として、〔熊〕7-58 で金將馬陵思謀が部下の相談を聞いて「歸降岳家」しようとする（後述例 186）段が、〔于〕では「岳家」が削除されているのが擧げられる。

いずれも細かい改変だが、こうした叙述の上での「規範化」により、皇帝と臣下の間には『東窗事犯』・〔熊〕の場合よりはっきりとした上下格差のあるものとして映ようになり、歸降したり叛したりするのは、（直接には特定の武將であっても、それを通じて）宋なり金なりといった「國家」「朝廷」である、という形で「皇帝」「國家」がそのほかのさまざまな諸勢力のなかで突出して映るような言葉の布置にシフトしていると言えよう。

#### 4.6. 帝・君王／朝廷・國家／民

忠義の「述べ方」に關して、もう一點、検討したい。

「0 .」で述べたように、中國の「傳統的」世界像モデルでは、皇帝が中心・頂點にあり、その周圍（ないし下）には、儒教的教養を身につけて皇帝を補佐する官（・その能力を持った人々である士）・その指導・統治をうける民、そして教化されていない「夷」が廣がり、その階層化の指標は「禮」に象徴される文化的な素養・能力であるために、各々の境界は曖昧で可變的なものとされる。「國家」も、領域をはっきり國境で區切った近代の nation state とは異なり、皇帝を核とし、周邊に行くほど徐々にその影響力が薄くなってゆく、「境界線」なき概念である。「朝廷」「國家」の語で皇帝個人を指す用法がしばしば見られるのもそうした「國家」概念の性格によると言えよう。

こうした「國家」概念は、今回検討の対象とした、岳飛故事を扱う通俗文學作品が成立・流通した時代においては、大前提とされ、基本的には大きな變動はなかったと思われる。しかし、これらのテキストを丁寧に検討すると、微妙ながら注目すべきシフトチェンジが見られると考えられる。

宋の皇帝家は趙氏であるため、〔熊〕では、李綱が高宗に「例 166 臣但知趙氏、不知有金人」と上奏する（2-9）楊邦義が金に降のを拒み、「例 167 寧作趙氏鬼、不爲他邦臣」と言う（3-24）等の用例が見られる。しかし、例 166 は〔于〕では「但知盡忠朝廷」に改変される。晩い時期のテキストにおいては、似たような表現も、例えば前掲「例 155 我岳飛但知有君不知有身」（『如是觀』24）、「例 168 生是宋朝人、死是宋朝鬼」（『説岳全傳』22）、「例 169 生于大宋即爲宋臣」（『説岳全傳』47）のように、より抽象的な・或いは廣い範圍を含意しうる語に変更されている。そして、これら晩い時期のテキストにおいては、李若水が「例 170 恨死不在趙家地」と嘆く（『精忠旗』3【新水令】）などの例もあるものの、秦檜

が「例 171 那二帝是趙家の二帝、河北是趙家の河北、管甚麼閑事。」(※)と言う、秦禧<sup>ママ</sup>が反亂を起し「例 172 那怕趙家天下不入我手」(『續精忠』20)と言う、など、宋朝に敵對的な者が、「あれは趙家のもの、趙家の問題で、自分とは関係ない」「(公の)天下を(私としての)趙家が専有している」といった、「公」的性格を持たぬ「私」としての皇帝・皇帝家<sup>23</sup>という側面を強調する際に用いる語となっている。

『東窗事犯』では、「與國家出力」「於家爲國」等もあるが、「扶立高宗旺」「扶持的帝業興」「扶一人立爲帝」といった、いささか「不敬」な言い回しが見え、こうした言い回しは他のテキストに見えないことは上述した。これに對し、『東窗事犯』以外のテキストでは、岳飛などの「正面人物」の忠義を述べるのに、「立」はもちろん「忠」「扶」「輔」「佐」「報」「答」などの目的語として、「帝」「帝王」「皇帝」等をとる形を用いることは稀である。「君王」の例は少数ある。「例 173 忠於君王」(『岳飛精忠』4)、「例 174 憑義膽報君王」(『精忠旗』15【嘉慶子】)、「例 175 輔佐君王」(『續精忠』6 趙逸修白)等だが、晚い時期のテキストでは、「君王」はむしろ「例 176 君王與后妃換却衣衫同奴隸」(『精忠旗』3)のように、「忠」を獻げられる對象としてではなく、個人としての皇帝の行動や状況を描寫する際に用いられる例が多い。「扶王室」(〔熊〕5-41)、「佐皇朝」(『東窗記』21【尾文】)なども少数である。

廣く見られるのは、「報朝廷」「與朝廷出力」「忠於朝廷」「報國」「報國家」「與國家出力」「扶社稷」「扶助江山」「扶宋室江山」などである。上述のように、そこで意味されているのは「皇帝を核とした『國家』」であり、近代的な意味の「國家」ではないが、その際、皇帝個人・「私」としての皇帝・皇帝家を連想させる語が避けられ、より抽象的な・より廣い範囲を含意しうる語が選擇され、「皇帝を核とした『國家』」の「公」性を強調する 或いは「公」であると装う 傾向がある點に留意すべきだろう。

先にふれたように、「忠君愛國」の用例は少ない。筆者が把握しているのは、『精忠旗』で施全が「例 177 我施全不曾講過忠君愛國的套數、只有眼裡看不得、肚內撇不下」と言っ  
て岳飛の仇を討ちに行く(31)、『續精忠』で、出家し變名して隱棲する牛皋が、他人のふりをして、牛皋を軍に復歸させようとしている趙逸修に、「例 178 聞人説牛將軍…一片忠君愛國之心致鬱鬱在念」とほめてみせる(6) の二例のみである。そもそも「忠君」を含む言い回しが少ないのだが、これは、上述の、皇帝個人を連想させる語より、朝廷・國家など、より「公」を含意しうる用語を選擇する傾向と関係があるだろう。

「愛國」は、さらに稀で、この二例のほか、〔熊〕で岳飛への詔に「例 179 憂君愛國之心」(5-39)が見える程度である。「國」を目的語にとる場合、上で例に擧げたように、「報國」が多く、『精忠旗』以降の傳奇・『説岳全傳』では「爲國」も多い。「爲國」は、早期の作品でも「爲國出力」「爲國死」のような連用修飾語の形で見られるが、これら晚い時期のテキストでは「一心爲國」「赤心爲國」など、獨立した形が多く見られる。「國」「國家」



が皇帝を核としたものとして想定されていると考えれば、「君主の恩に報ずる」という「報國」の語が多用されるのは自然である。こう見てくると、「愛國」の用例がそれほど多くないのも道理で、この語は、皇帝を核とした「傳統的」「國家」像より、近代の國家にこそふさわしい。「(忠君)愛國」は、「套數」と言われるほど「おなじみ」の表現とされるが、その分布には興味深い偏りがあり、四部叢刊・四庫全書等のデータベースで検出される用例数自体は、「報國」に比べずっと少い。この語が爆發的に流通するようになるのは近代化過程においてかもしれない<sup>24</sup>。

さらに、『説岳全傳』においては、「爲國爲民」の語で岳飛らを讃えるのがしばしば見られる(他のテキストでは、『精忠旗』で秦檜が「例180議和原是爲國爲民」(17)と言っている例が見えるのみ)。もちろん、どのテキストにおいても、「救黎民」等の語や、朱仙鎮の段で地元の父老が岳飛を引き留める場面(・それを受けて岳飛が岳雲(『東窗記』)・牛皋ら(『説岳全傳』)を駐留させておく情節)等で、岳飛が「民」のために貢献したことは言及されているのだが、「迎還二帝」「盡忠報國」に比べるとだいぶ影が薄い。『説岳全傳』においても、岳飛が民のためにこれこれをした、といった情節が特別に増えているわけではないのだが、賊を平定し金に立ち向かう岳飛の事業が「爲國爲民」の語で表現されるのに出会うとき、読者は、「國」と「民」とが連結・連続した、(皇帝を中心としつつも)「民」をも含めたより廣い、抽象的な何かをイメージするのではないだろうか。

『東窗事犯』(熊)など、早期のテキストにおいては「帝」「高宗」「趙家」への貢献は、それだけで肯定・稱賛されるものとして提示されている(或いはそれは、それらの語で「皇帝を核とする國家」をも含意し得たからかもしれない)。

時期の晚い諸テキストの状況は、「皇帝」が、「公」的な、「皇帝を核とする國家」としての側面と、「私」的な「皇帝個人、皇帝家」としての側面とに分割され、後者のみを示す語彙は「盡忠」(等)の対象としては避けられるようになり、より「公」的な側面を含意する「朝廷」「國」「國家」等が、「盡忠」(等)の対象にふさわしい語彙として選擇される傾向にあると見ることができる。さらに、「爲國爲民」がたびたび使われる『説岳全傳』では、それまで周縁部にあり影の薄かった「民」が「國」と並稱・連結されており、岳飛らの事業が向けられ・ささげられている対象として、(皇帝を中心としつつも)「民」をも含めたより廣い、抽象的なものを喚起する布置になっている。

「皇帝を中心としつつも、民を含めた、より廣い、抽象的な何か」それは、近代の國家や民族と、相違しつつもどこか重なり合うようである。「5」では、岳飛故事の通俗文藝における、民族に関わる叙述を検討していきたい。

注

- 1 この問題に言及した文献は非常に多いが、山田(1949)、安部(1956)、小倉(1970)、于省吾(1981)、日原(1984)、于溶春(1986)、佐藤(1989)、堀(1993)、茂木(1993、1995)、濱下(1994)、陳連開(1994)等を参考にした。本稿と直接は関係ないが、清代の外交文書の「天朝」「中國」等の用語を分析した川島(1997)は、前近代を一枚岩的に扱っている一部の文献とは一線を畫し、示唆に富む。
- 2 小説の版本の詳細については、大塚(1987)、孫楷第(1982[1933])等を参照されたい。
- 3 なお、『新鐫全像武穆精忠傳』八卷八十則は、天徳堂刊本(『古本小説集成』第三批所収)、映秀堂刊本(天一出版社『明清善本小説叢刊』所収)で見える限り、〔熊〕の一バージョンと見られる。天徳堂本は、清白堂本、三台館本より仁壽堂本に近く、一、二字から数文字の出入りがあちこちにある。増加もあるが、削除部分が多い。〔熊〕の清白堂本・仁壽堂本の後ろについている九、十巻「精忠録」はなく、その後序(李春芳)が巻頭に移されている。
- 4 『水滸傳』第九十回で、朝廷の扱いに怒った好漢たちが再び反しようと考え、呉用からこれを耳にした宋江が、翌日好漢たちを集め、自分を斬ってから行えと言う情節はこれと類似している。(『水滸傳』も、嘉靖年間には存在していた記録があるのでどちらが先行しているかは断定できないが)。
- 5 仁壽堂本は「仇」に作り、これであれば「仇である虜に報いる」と解釋することになるが、むしろ普通の「醜虜」に校訂すべきかもしれない。
- 6 清白堂本は「有」に作る。ここでは仁壽堂本に従う。
- 7 秦檜の夫人はこの劇では、「當時不信大賢妻、他曾苦苦地勸你」(2【石榴花】)とあるように、善玉だったと推定されている。
- 8 「帝を立てる」といったある種不遜な言い回しは元刊本には他にも見られ、脈望館鈔本がある場合には、そこでは削除・矯正されている。岩城(1954)、小松(1991)参照。三國故事の雜劇の例について、笠井(1998:62)参照。
- 9 「撥」を消して「留」に直してある。
- 10 『精忠記』では「移孝爲忠」に作る。
- 11 『精忠記』では「中原」に作る。
- 12 このほか、13で岳飛は土地の父老たちを安心させるため、岳雲・張憲に朱仙鎮に残るよう言い置き、20でも「我兩個孩兒見統兵在朱仙鎮上」(【集賢賓】)とあるにも関わらず、17で岳雲・張憲は鄂州の家に戻って張氏・銀瓶と會っており、21で岳飛の手紙は岳家にもたらされることになっている(『精忠記』では岳飛は岳雲らに鄂州に戻るよう指示している)。このあたりの設定は不安定だったことがわかる。
- 13 この情節と理屈は、『水滸傳』で、宋江が自分の死後李逵が亂を起こし「忠義之名」を壊すのを恐れ、呼び寄せて毒酒を飲ませ、殺してしまうのと類似している。
- 14 『精忠記』では「忠」に作る。
- 15 『東窗記』27では井戸に身を投げることになっているが、32では施全が「夫人撞石而死」と言っており、どちらの説も流傳していたのであろう。
- 16 この齣には姓名が明記されていない。脚色が丑で勘官の變更がどこにもふれられていないことからすれば万俟卨と考えるべきだが、20での万俟卨の態度とはかなり異なっており、またそうだとすると万俟卨への報應は厳しすぎるのではとも思われる。別の人物が勘官とな

ったと考えるべきなのかもしれない。

- 17 随所にあるが、例えば、15に引かれている満江紅詞は「<sup>ママ</sup>壯吻飢餐金人肉、笑談渴飲金人血」となっており、「金人」は埋木改變のように見える。また、李若水が金に投降を迫られて拒絶する際の「歎 輩無端狂吠」(3【沽美酒帶太平令】) 韓世忠の自己紹介「向與張浚劉岳飛三人同主用兵、屢敗金、軍中稱張韓劉岳」(22)の の箇所は不自然に削られている。
- 18 『精忠旗』では、万俟卨は岳飛に舊怨があるわけでは別れないが、秦檜に取り入り利を得る好機と考え、「ある」と答えて勘官の役を引き受けたことになっている。
- 19 何立の話は褚人獲『堅瓠甲集』巻四「東窗事記」引『江湖雜記』に見えることが知られるほか、張昱『可閑老人集』巻二「詠何立事序」に見える(郭英徳:1997:349等参照)。
- 20 眉批に「精忠旗是地府の大證見」とある。
- 21 この文字は鈔本では読みとりにくく、不明である。
- 22 このほか、〔熊〕1-6で、康王が欽宗から黄袍を着せかけられる夢を見た側近に語る場面も〔于〕は削除している。
- 23 これは、明末の思潮において、黄宗羲に典型的なように、民の私利私利に対立する皇帝の「大私」、「一人一姓の私」として皇帝権力をとらえる傾向が強まった(溝口:1980)ことと関連があると考えられるべきかもしれない。
- 24 國立中央研究院『二十五史』データベースでは「愛國」は十一例のみで、うち五例が『清史稿』の用例である。

#### 引用文献

- 安部健夫 (1956)『中國人の天下觀念』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員會
- 岩城秀夫 (1954)「明の宮廷と演劇」『中國文學報』第1冊、のち『中國戲曲演劇研究』創文社、1973年に収録
- 岩城秀夫 (1961)「元刊古今雜劇三十種の流傳」『中國文學報』第14冊、のち『中國戲曲演劇研究』(創文社、1973年)に収録
- 上田望 (1996)「講史小説と歴史書(1) - 『三國演義』、『隋唐兩朝志傳』を中心に - 」『東洋文化研究所紀要』第130冊
- 上田望 (2000)「講史小説と歴史書(4) - 英雄物語から歴史演義へ - 」『金沢大學中國語學文學教室紀要』第4輯
- 大塚秀高 (1987)『増補中國通俗小説書目』汲古書院
- 小倉芳彦 (1970)「華夷思想の形成」『中國古代政治思想研究』青木書店
- 笠井直美 (1998)「『二帝各叙宗祖』 元明の三國故事の通俗文藝における君臣秩序に関わる叙述」『言語文化論集』第XIX巻第2號
- 川島真 (1997)「天朝から中國へ - 清末外交文書における「天朝」「中國」の使用例」『中國 - 社會と文化』第12號
- 金文京 (1983)「『元刊雜劇三十種』序説」『未明』三號
- 小松謙 (1991)「内府本系諸本考」『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』汲古書院
- 小松謙 (2000)「『脈望館鈔古今雜劇』考」『日本中國學會報』第52集
- 佐藤慎一 (1989)「儒教とナショナリズム」『中國 - 社會と文化』第4號
- 高津孝 (1992)「按鑑考」『鹿大史學』第39號

- 田仲一成 (1981)『中國祭祀演劇研究』東京大學出版會  
千田大介 (1997)「岳飛故事の變遷をめぐって - 鎮魂物語から英雄物語へ - 」『中國文學研究』第23期  
濱下武志 (1994)「近代東アジア國際體系」『講座現代アジア 4 地域システムと國際關係』東京大學出版會  
日原利國 (1984)「華夷觀念の變容」『哲學研究』第550號  
堀敏一 (1993)『中國と古代東アジア世界 中華的世界と諸民族』岩波書店  
溝口雄三 (1980)「中國における公私概念の展開」『思想』第669號、のち『中國の公と私』(研文出版、1995年)に収録  
茂木敏夫 (1993)「中華世界の「近代」的再編」『アジアから考える[2] 地域システム』東京大學出版會  
茂木敏夫 (1995)「清末における「中國」の創出と日本」『中國 - 社會と文化』第10號  
山田統 (1949)「天下という觀念と國家の形成」『共同研究・古代國家』啓示社  
渡辺宏明 (1991)「『大宋中興演義』と『宣和遺事』」『汲古』第19號
- 陳連開 (1994)『中華民族研究初探』知識出版社  
戴不凡 (1980)『小説見聞録』浙江人民出版社  
郭英德 (1997)『明清傳奇綜録(上)』河北教育出版社  
石昌渝 (1998)「朝鮮古銅活字本《精忠錄》與嘉靖本《大宋中興通俗演義》」『東北アジア研究』第2號  
孫崇濤 (1998)「明人改本戲文通論」、王慶玲・華偉編『明清戲曲國際檢討會論文集・上』中央研究院中國文哲研究所籌備處  
孫崇濤 (2000)『風月錦囊考釋』中華書局  
孫楷第 (1953)『也是園古今雜劇考』上海上雜出版社  
孫楷第 (1982[1933])『中國通俗小説書目』人民文學出版社(初版は國立北平圖書館)  
王利器 (1981[1958])『元明清三代禁毀小説戲曲史料』(增訂本)上海古籍出版社(初版は作家出版社)  
于省吾 (1981)「釋中國」『中華學術論文集』中華書局  
于溶春 (1986)「“中國”一詞的由來、演變及其與民族的關係」『內蒙古社會科學』1986年第2期  
鄭振鐸 (1934)「岳傳的演化」『中國文學論集 上』開明書店、のち『中國文學研究 上』(作家出版社1957年)等に収録  
莊一拂 (1982)『古典戲曲存目彙考上・中』上海古籍出版社
- Idema, W.L. (1974) *Chinese Vernacular Fiction*, Leiden, E.J.Brill